

平成24年度第3回史跡小田原城跡調査・整備委員会 植栽専門部会 会議録
(第9回)

日 時 : 平成25年1月29日(火) 13:30~17:40
会 場 : 小田原市郷土文化館会議室
出席部会員 : 小出部会長、杉山幾一副部会長、榎本部会員、小笠原部会員、勝山部会員、
木村部会員、杉山実部会員、鈴木志真夫部会員、鈴木崇部会員、
富田部会員、森谷部会員
事 務 局 : 前田教育長、諸星文化部長、奥津副部長
文化財課(加藤課長、大島副課長・史跡整備係長、佐々木主査、岩崎主任、
飯山主事)、
観光課(諏訪間専門監・二見係長)、都市計画課(清水景観係長)、みどり公園課(今井公園係長、石井主査)、

事務局 皆様こんにちは。少し定刻より早いですが皆様おそろいですので始めさせていただきますと思います。本日はお忙しいところ、ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。ただ今から平成24年度第3回史跡小田原城跡調査・整備委員会植栽専門部会を開催いたします。本日は宮内部会員が都合がつかないということで御欠席の連絡があったので、御承知置き下さい。また、オブザーバーとして本日も県教育委員会から谷口副主幹にご出席いただいております。ありがとうございます。また、(株)文化財保存計画協会から小幡様・吉川様にもご出席いただいております。よろしく願いいたします。そのほか小田原市から文化財課だけでなく、都市部都市計画課、経済部観光課、建設部みどり公園課から関係職員が出席しておりますので御承知置きください。

それでは本日はこの植栽専門部会、12月で2年の任期が一度切れているので、改めてただ今より委嘱式をさせていただきます。お名前をお呼びいたしますので、その場でお立ちいただき、お受け取り下さい。なおこの植栽専門部会の任期は2年で、平成24年12月27日から平成26年の12月26日までとなります。よって委嘱の日は12月27日付になりますので御了承下さい。では教育長から御委嘱申し上げます。よろしく願いします。

(委嘱状交付)

事務局 皆様、よろしく願いします。それでは改めまして教育長から御挨拶申し上げます。

教育長 皆様、こんにちは。小田原市教育長の前田でございます。

1月20日に大寒を迎えまして、寒のうちの中でも最も寒い時期に入っておりますが、そのようななか、本日は部会員の皆様方におかれましては、お忙しい中を24年度第3回史跡小田原城跡調査・整備委員会植栽専門部会にご出席をいただき、誠にありがとうございます。また、県教育委員会から谷口副主幹にもご出席をいただき、誠にありがとうございます。

只今、皆様を史跡小田原城跡調査・整備委員会植栽専門部会の部会員としてご委嘱申し上げましたが、本専門部会は平成22年12月に発足し、このたび、2期目を迎えることとなります。皆様に再任をご了承いただきましたこととともに、これまでの2年間にいただきましたご指導・ご協力に対しまして厚くお礼申し上げます。また、今後とも植栽の取り扱いに関するご指導・ご協力をいただきますよう、お願いいたします。

さて、小田原城址公園全体の植栽管理につきましては、これまでに毎木調査を行うなど全体の現状把握に努めるとともに、昨年11月には現状の植栽をできる限り生かした中でのモデル的な修景ということで、鈴木崇部会員にご協力をいただきまして、本丸と二の丸の樹木伐採・剪定を行っております。本日は、この修景の状況をご確認いただくとともに、その成果について検証していただき、今後につながるご意見をいただきたいと考えております。

また、現在、史跡整備に伴う発掘調査を行っております御用米曲輪につきましては、先日新聞報道も行われておりますが、当初は想定していなかった戦国期の重要な遺構が発掘調査により続々と検出されております。引き続きそれらの全容把握に努めてまいります。御用米曲輪の平場部分につきましては、その遺構の整備方針等が大きく変更になる可能性がございます。しかし、現在課題となっております北東土塁上のクスノキの取扱いにつきましては、その議論の根底が変わることはないと考えておりますので、本日ご提示させていただく案について、引き続きご意見をいただきたいと存じます。

史跡小田原城跡の整備は、植栽の取り扱いをはじめ、時代の変化とともに様々な要素や視点を盛り込む必要が出てきておりまして、それだけに本市のまちづくりの核として、寄せられる期待も非常に大きいものになっております。部会員の皆様方におかれましては、今後もより一層のご指導とご協力を重ねてお願い申しあげまして、挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

事務局

ありがとうございました。恐れ入りますが、教育長は公務の都合でここで退席させていただきます。ご了承をいただきたいと思います。

本日は新たな任期後の最初の会議でございますので、部会員の皆様にご自己紹介をお願いしたいと思います。小笠原部会員から順に、簡単に結構ですが、よろしくお願いたします。

- 部会員 小笠原でございます。皆様とは顔馴染みで、議論に関わってきた間柄でございますので、取り立てて申し上げるようなことはありませんけれども、一番大事なところは、ここは城址公園、城郭というものを前提にした公園として機能していかなければならないという宿命を背負っております。そういう方向で整備が進められていくことですから、その枠組みとセオリーを踏まえた適切な筋の通った議論を重ねて、よい城跡公園を作るという方向で皆さんと議論しあっていきたいと思っております。よろしくお願ひします。
- 部会員 小出和郎と申します。引き続きよろしくお願ひをいたします。御用米曲輪のことが一つのシンボルですが、小田原城の植栽の問題は、全体の問題やまわりを含めたまちづくりやそういうことも含めて考えていく要素だと感じています。引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。
- 部会員 生命の星・地球博物館の勝山です。植物学を専門にしております。それから小田原市の文化財保護委員をさせていただいております。そのような立場からお城の緑について考えることのお手伝いができればと思っております。引き続きよろしくお願ひいたします。
- 部会員 杉山です。大分この関係、長いものですから、今年の12月限りで引退させていただこうと思っていたのですが、問題が継続しているのでということで、もう1期、皆さんとよろしく御指導願ひたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひします。
- 部会員 鈴木崇と申します。こういう歴史的な史跡の景観維持ということで、植栽の存在、これをいかに生かしていくかということで、非常に難しい選択を迫られる立場にありまして、皆様の共感を得ながら風情ある小田原城の景観づくりということを念頭に頑張りたくと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。
- 部会員 富田改と申します。引き続き専門部会の部会員ということで、よろしくお願ひしたいと思ひます。私は造園家ですが、今回は樹木医という立場で色々な意見を述べさせていただいております。私の方の立場からすれば樹木との付き合い方、どういう付き合い方が一番いいのかということ念頭に置いて、色々文化財のあり方等々議論に参加していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひします。
- 部会員 自治会総連合の木村でございます。昨年に引き続きましてまた今回も部会員ということで、皆さんと一緒に小田原城のことを考えていきたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。
- 部会員 小田原ガイド協会の会長をしております榎本でございます。日頃観光客のガイドをしておりますと小田原の文化財、小田原の歴史を中心にご案内し

ていますけれども、そういう立場から小田原の文化財を守るということですね、特に小田原城址公園のいわゆる観光地としての価値を高めるということですかね、そういう立場でいろいろ発言して行きたいと思っております。どうぞよろしくをお願いします。

部会員 市民委員の森谷と申します。市民委員ですけど自分は専門としては遺伝育種学というのが元でして、ビオトープ管理士及び森林インストラクターとして、市民活動として森の手入れと、それから森林植生の保護に取り組んでいます。いつもは森で測量と選木をやって自分でチェーンソーを使って切って森全体を作るというような立場でやっています。あと、もう一つは木を利用する立場から木工芸をやっておりまして、ロクロ、ウルシなど木を利用する立場もしています。よろしくをお願いします。

部会員 鈴木志真夫です。本丸・二の丸が国の史跡指定だということは私も十分承知しております。しかしながら、小田原の中心市街地においてこれだけまとまった緑があるところであるという側面も見落としとしてはならないと思います。いずれにしても、この城址の植栽のあり方というのは小田原のまちづくりの非常に大きなテーマだろうと思います。今後ともよろしく願いいたします。

部会員 杉山実と申します。小田原城が50年先、100年先、小田原のまちづくりにとって最大の魅力になるような形の方向づけの、少しでもお役に立てばと思います。よろしくをお願いします。

事務局 ありがとうございます。次に、事務局の出席者でございますけれども、お手元の参考資料の中に参考資料の2として事務局側の出席者の名簿を付けてございます。また参考資料の3に席次表がついてございますのでそちらでご確認をいただければと思います。資料がお手元にない方がいらっしゃいましたらお知らせ下さい。よろしいでしょうか。

それでは、次に、資料全体の確認をさせていただきます。本日の配布資料につきましては、資料1から資料4まででございます。それから、参考資料といたしまして1から5までお付けしてございます。確認をしていただきまして、不足等ございましたら、お申し出いただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

それから部会員の皆様にはそれ以外に平成23年度の第4回の植栽専門部会の会議録、それから24年度の第1回、第2回の会議録がその下にあるかと思っております。なお、第2回の会議録につきましては本日御協議いただく部分の議題の部分だけとなっております。残りの部分も早期に作成いたしまして、また皆様に御確認いただきたいと思っております。昨年度の第4回と今年度の第1回の会議録につきましては既に皆様に一度お送りをさせていただいて

内容について御確認をいただいておりますけれども、もし何かおかしいということがさらにございましたら、今週のうちに御連絡いただければと思います。その後に来週早々にでもホームページの方に掲示したいと思います。よろしく願いいたします。

それでは次に、この専門部会の部会長・副部会長を選出していただきたいと思います。お手元の参考資料の中の4「史跡小田原城跡調査・整備委員会植栽専門部会設置要領」第5条第1項によりまして、部会員の皆様の互選により選出していただくこととされております。

なお、第6条第1項では、この会議の議長は、部会長が議長となるとされておりますけれども、部会長の選出に当たりましてその部会長が決定するまでの間、私の方で進行させていただきますのでよろしく願いいたします。

それでは、部会長及び副部会長の選出につきまして、ご意見等がございましたらお願いいたします。

部会員
事務局

第1期目と同様ということよろしいかと思ます。

今第1期と同様という御意見がございましたけれども。第1期は部会長部会員それから副部会長を最終的には部会員にお願いしましたけれども、いかがでしょうか。

部会員
部会員

いいんじゃないでしょうか。異議なし。

この会に出てくること自体がちょっときつい点も、いろいろあるので、実際副部会長というのは、先生が全部やってくれるから座っているだけでいいのだけれども、できれば私は勘弁していただいて、本来が自治会総連合の方が最初はやっておられたので、よろしければ部会員にお願いできれば、というふうに思います。

事務局
部会員
事務局
部会員

今部会員にというご意見もございましたけれども、いかがでしょうか。

部会員がそれでよろしければ、それでもよいと思ますが。

部会員はよろしいですか。副部会長というご推薦がありました。

皆さんが手を挙げないのでしたら、部会員のお話があったからお引き受けしてもよろしいです。

事務局

それでは、部会長につきましては特に御意見もないようですので部会員に引き続きお願いするということで。それから、副部会長につきましては部会員にここからお願いするということで、よろしいでしょうか。

部会員
事務局

はい。(拍手)

ありがとうございます。それではただ今申し上げたように、部会長は部会員、副部会長は部会員ということで決定をさせていただきます。よろしくお願いいたします。お二方、恐れ入ります。部会長席、副部会長席の方に

でございます。詳細はお付けしてある資料1のとおりでございますけれども、二の丸銅門広場と本丸広場をそれぞれ御覧いただいたうえでの評価・検証を行いたいと考えておりますので、現地ではそれぞれ御意見をいただきたいと思っております。また、戻ってから意見をいただく時間を設けたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

それから次の(2)御用米曲輪の植栽の取り扱いについてでございますけれども、先ほど教育長のあいさつでも述べておりましたように、現在進めております御用米曲輪の平場部分の発掘調査におきまして、昨年夏の大型礎石建物跡が確認されたことに続きまして、戦国時代の庭状遺構が確認されるなど、重要な遺構の発見が続いておりますけれども、これらの発見により、戦国時代に北条氏の主殿それから会所といった、極めて重要な建物が存在した場所である可能性が大変高まってきております。これにつきましては、資料3として、現時点での中間的な所見をお付けしてございます。現在議論を進めております北東土塁に関しましては、クスノキの取り扱いも含め、これまでと大きな変更はございませんけれども、御用米曲輪全体の調査と整備の考え方、進め方が、従来の計画と変わって来ております。そこで、資料の2に北東土塁上のクスノキの扱いを含めた現時点でのスケジュール案をまとめさせていただいたので、戻ってから御説明させていただきたいと存じます。

最後に、北東土塁の植栽管理についてでございますけれども、これまで数回にわたり多くの議論と検討を加えていただけてきておりますため、時点で色々変わっているところがございますこともあり、それらを一つの資料という形でまとめ直したものが、資料4に付けてございます北東土塁の植栽管理の実施計画(案)でございます。これにつきましても、戻ってから御説明させていただきますけれども、今回事務局案のとおり修景を実施した場合の将来像についても、事務局として図を用意させていただきました。これはあくまでも事務局の手作業で作ったようなものです。現地でもそういった視点で土塁上の樹木について御確認いただいて、こちらに戻りましてから御議論いただければと考えております。説明は以上でございます。現地視察をよろしく願いいたします。

部会長

はい、説明は以上のとおりですが、特になければ、暖かいうちに現地に行きたいと思えます。

事務局

資料は1から4の資料をお持ちいただければと思います。恐れ入ります。

部会長

2もですか。

事務局

2も一応お願いします。

(1) 城址公園全体の植栽管理について(現地視察後)

(事務局による説明)

部会長 それでは、スケジュールとモデル的な修景整備について、現地から帰ってきて事務局から再度説明願います。

事務局 現地をご覧いただき、ありがとうございました。部会員から丁寧な解説をいただき、評価点とか課題も出てきたかと思えます。そのほかの意見としては、樹木そのものよりも電灯なども目立つようになってしまった、それへの配慮も必要ではないかということが改めて出てきたように思います。

 ここへ戻りまして、繰り返しになりますが、実施した作業そのものについての評価、作業でもう少しこれもやっておいた方がよかったといった意見があれば、それから電柱のように植栽以外のことで気づいた点、それから実際に今行っておりますモデル的な修景整備について今後も含めた点、そういった点について、ご意見があればお願いしたい。

部会長 皆様のご意見をいただきたいことを4点ほど言われていまして、再確認します。一つは、今回実施した作業そのものをどう評価するかということ。二つ目は、今回の作業で不足等を感じる点、それから、植栽、樹木以外のことで今回の作業で気が付いた点、もう一つは、今後のモデル的な修景整備に関してのご意見、その4つです。ご意見がある方、お願いします。

部会員 よろしいですか。ぜひ発言しておきたいと思ったことは、今回の修景は非常に効果がありまして、私たちガイド協会で城址公園内をいろいろ案内させていただいていますが、銅門を入ったところから天守閣が見えるようになりましたね。あのアングルで観光客から写真を撮ってくださいと頼まれる機会が大分増えました。頼まれるだけではなくて、観光客がお互いに、よく写真を撮り合っているんです。それで、今日銅門を上から見たところも、大分木がなくなりましたので、銅門が上から望めるようになったんです。あれは今まで見えなかったアングルで、非常にインパクトがある情景が望めるようになりました。

 それから、もう一つ、私がぜひ実現したいと思っていることは、今日ここに参加するために御堀端を歩いてきまして、メガネ橋（馬出門土橋）のところ、御堀端通りからどのように見えるか楽しみに来たんですが、メガネ橋を渡るときに正面を見上げますと、この少し先の土手にマツが3本ほどあって、支障をするんですが、その先には馬出門、銅門、常盤木門、天守閣が大体一直線上に見える情景が出てくるんです。これを実現すると、全国にない景色が生まれてくるのではないかと。やはりこれは、小田原城のビューポイントの最大のビューポイントではないかと私は思っています。ですから、ぜひ実

現していただいて、そうすると、観光客も小田原城はこんな素晴らしい景色があったのかと、結構リピーターが増えるのではないかと思います。

部会長

先生、現場でご説明いただきましたが、できれば再度お話しただければよいと思います。

部会員

今回やらせていただいた場所が、特に劇的に効果が出るところをやったものですから、私がどうこうということではなくて、そういう状態になってしまっていたので、いずれそういうふうにしなければならない場所だったわけです。今回そういうことでやらせていただいて感じたことを技術的なことと言いますと、こういう木に機械に乗って剪定をすると、御用米曲輪の時はそういうやり方をしましたが、切りたい枝が、入れないので、切れないことがありましたが、今回は森林組合の職人さんが、結構年配の人ですが、私の思うことをよく理解してくれて、高いマツなどをチェーンソーを持って上がって作業をしてくれました。そういう技術の伝承というものが、今なかなか街中でこういう大きな木を手掛けるという仕事がなくなってきていますので、技術者が育たないんです。今回は運がよかったと思います。まだまだ城の中のむだな木とかについて、そういう熟練工について若い人が仕事を覚えてもらって、まだまだ小田原にはこういう技術者がいるということ、それからその方が後継者を育てる、それを市がバックアップして、良い人材を育てていただきたい。

ご覧になったように、お城の景観というものは、やはり、お堀、石垣、橋、それから城郭建築ですね。その建築と樹木が絡まった景観というものをどういうアングルからどういうふうに見せたらよいのか、それから見せ方についても丸見えにするのか、樹間越しに木の間から見せるのか。状況によって、現在生えている木の木ぶり、あるいは幹の並び方とか、そういうものと見るアングルとの、そういうところは少しデリケートになりますが、そのアングルを、ここが一番良いなというところで決める。

それから、一方的なところから見た検討ではなくて、真裏から、また別なアングルから見た場合にどういうふうに見えるのか。少なくとも3か所ぐらいからはポイントを決めて、その上で、この枝を下ろした方がよいとか、この幹はない方がよいとか。それからそれを切った場合に、向こうに見える景色が、植栽、どういうふうにある。それで、将来そこに対してもう少し木が足せるのか足せないのか。その辺まで読みたいのですが、残念ながら現在私はこのお城の将来的な史跡と公園の性格を持つ、例えば園路計画、広場構想とかそういうものが遺跡と絡んでいますから、どうなるのかということがわからないから、今とりあえずあたりさわりのないところをやらせていただいたわけです。

部会員

ですから、今後検討されて、そういう時点になりましたら、植栽の方も考え方が決めやすくなるのではないかと思います。

今、部会長から、4つの課題でどう評価するか、不足分はないか、植栽以外で気づいたことはないかということですが、私の意見を述べさせていただきたいと思います。

評価としては、非常にお城が見えやすくなって効果大であると思います。先生がおっしゃった銅門を入れてからひよろつとしたマツが1本ありますが、先生は結論をおっしゃいませんでしたけれども、将来的なことを考えると、あの1本はちょっとどうかなという思いです。木自体はむだな木はないんですね。どういう視点でとらえるかによって、人間にとってこうだよということになりますので、その辺は今後、ビューポイントをいくつ作るかという視点で。この小田原城は、お城が命ですから、それを見せるためには、少しご退場願う木が出るなど。やむを得ないなど。ビューポイントをどう絞るかによって今後の事業を計画していただいたらよろしいのではないかと思います。

それから、先ほど電灯、電柱とか言いましたけれども、これは本当に目障りで、木がなくなってみますと、なんでこんなところに電柱が立っているの？傾いた電灯が立っているの？という話になりますので、その辺は早急に改善していただいた方がよろしいかと思います。

部会長

ほかの部会員の方はどうですか。

部会員

やはりやってみると結果が見えるし、今回こういう試みでやられたのは非常に成功だったと思います。今の銅門の広場から見たときもそうですが、僕も今日御堀端の方から来て、よくなったなど。また、こういうことをやるから、ほかの部分も見えてきて、今まで電柱などは見えなかったのに、今のご意見にもあったように、人工物でああいうものというのは、考えてみればあったんだなということがはっきりしてきますので、次のビューポイントで同じような形でいくつかの視点で見ながらやっていくと、だんだん良くなっていくのかと。夏などの日陰の状態なども見ながらやっていくのかなと思います。御用米の方も、あの木を全部切ってしまうと暑くなって大変なんだろうなというように、その辺の兼ね合いというものは、今回見た目にはお城が見えて木陰なども確保できるように切れているなど思いながら見ていました。別途作るのではなくて、ある木を利用しながら形を整えていく、そういう意味でよい試みだったかと思います。

引続きいくつかの方向で試みられていくと、場合によって将来補植をしていくという時に、どういうところに必要なかということがはっきり見えてくる可能性もあります。小田原市の公園の中の史跡公園として不足している

緑がどういうところなのかということがわかってくると、今度は全体の植栽につながってくると思いますので、ぜひこの方向で進めていただきたいと思います。

部会員 元々この部会は環境と景観の兼ね合いの問題から出発したんですが、景観の立場から評価すれば皆さんのとおりですが、環境の立場、温度とか、土壌の様子とか、それから樹木の今後の様子などを考えて、その点から評価はまるで出ていないわけです。それは、下層植生といいますけど、明るくなったことによってどうなるか、そこに関する評価というのは数年しないと出てこないわけです。ですから、地球的にやる中には、下層の問題とか温度とか土壌とか、そういう問題と組み合わせて検証しないと、環境ということが課題になったことについて評価ができないと思いますので、その点をよく意識していただきたい。

部会長 それは今の段階では無理だという理解ですか。

部会員 現時点では、修景のことで評価しかできないと思います。夏になってみてどうなるかといったことは、できれば科学的な評価などができればよかったですと思いますが、そこまではできなかったのです。

部会員 「私の」といった方がよいか、「私たち」といった方がよいか、一応会を代表している立場なので、別に天守閣や常盤木門がすっきり見えるポイントがあるべきだということについては、否定するものではありません。

そういう点で、今回の先生が指導された修景のあり方というものは、我々が聞いている範囲でも、かなりすっきりしたとプラスの評価が出てきている、という全体的な意見を聞いています。

先生は、先ほど現地で、関係代名詞という話をされましたが、いわゆる本丸にあるマツとあるいは馬屋曲輪にあるマツを、将来的には一連のものとして考えた場合には、あそこにあるあのマツはあの形で残しておく方がよいのではないかというようなことを言われたので、素晴らしい視点ではないかと思えます。

それで、御堀端から馬出門を見たときに、後ろにあれだけのマツの借景があるから、非常に際立ってよく見えるんですが、逆に銅門側から馬出門を振り返って見ると、ほとんどマツが見えない。後ろにはコンクリートの建物。ああいう景色はやはり何とかしなければいけないのではないかと私は思っています。

ですから、将来馬出門の前には、今、サクラが1本ぐらいしか残っていませんけれども、あそこ辺りには何らかの補植を修景的に考えるべきではないかと。銅門についても、あの広場も、ほとんど広場の中に1本も樹木がない状態なんですけど、将来的にはそのあたり修景上どうするかという観点も考え

ていくべきではないかと思えます。

それから、先生が言われたように、あの人工物が目立って出てきてしまったと。写真を撮ろうにも、電信柱が2本、3本、電線を含めて写るということは、ちょっと写真も撮れないような状況なので、なかなか地中を触るといふことも文化庁との関係で難しいとも思いますが、何らかの形で景色から取り除くというような、低くするとか、何とかそういうような工夫をすべきではないか。これは、ほとんど皆さんが、すっきりしたけれども、とんでもないものが出てきた。何とかすべきだということには異論はないのではないかと思います。

部会員

今回の修景については、市民の皆さんの評価は圧倒的にプラス評価ですね。特に銅門から天守閣が見えたという景観回復について、こんなわかりきったことを何でもっと早くできなかったのかということまで言われています。やはり小田原城跡というものは、これを見せるということできり立っている世界ですから、こういう景観整備はあまり躊躇することなく鮮やかに見せてあげるといふ方針のもとに対処していかないと、本来の小田原城の魅力が速やかに引き出せない。

また、城跡を引き立たせることによって、周りの緑も逆に生きてくるんです。銅門から見たときに左側のビャクシンと右側のマキの古木が際立って輝いている。まさにこれがお城の景観で、園芸植栽というものはそういう美しさで見せることが身上です。ただやみくもに無秩序に生育した緑がただそれだけで豊かだとか、美しいだとかということは、園芸の場合は、成り立ちにくい。その辺は一定の審美眼の水準に基づいて取捨選択の処理をしていく、そういう判断をしていかなければいけない。

今回の成果について見ると、先生のご努力には深く敬意を表しますが、それでも心残りになった点は、天守の前の3本のマツを残したこと。天守は確かによく見えるようになったんですが、やはりあの残された3本のマツは釈然としない。そこで来た方何人かに、3本残された松について感想を聞いてみると、しばらく見てから、あれはどうして3本だけ残したのかという人がかなり多かったんです。これはあの松の立ち位置が不自然であることが、よりはっきりしてきたということでしょう。今までは枝葉が立て込んで天守もろくに見えなかったから、松の存在に疑問さえ持たなかった。今回ここまで枝葉を整理してみると、逆に、なぜあそこにあの3本のマツがなければならぬんだという疑問が出てくる。そのことは銅門から見た常盤木門の門前に立つマツについても同じことが云えるんです。

常盤木門の前に見える太いマツ、あれは立ち位置が悪過ぎるんです。門扉の正面にバーンと立っている。太さも過ぎて、先生の剪定のご努力にもか

かわらず、残念ながらやはり無理な位置に立っている木はいかんせん無理に見えます。不細工というほか申し上げようがない。公共の景観としては、そういう不細工感はあまり残したくない。見せ場では鮮やかにきれいに見せてあげるといふことに、思い切って対処していかないと。園芸の美観を整備する上で、心置きなく次の段階に進みにくい。

先生は、このマツを、本丸側から見た場合、銅門の外、馬屋曲輪のマツに視線をつなげるリエゾンの役割を果たすという位置づけで説明されたんですけども、お気持ちはわかりますが、果たして感覚的につながった効果が出ているかどうかということは、私には疑問です。むしろ松はない方がすっきりとして、両側のビャクシンとマキが引立って見える。それから先生が魅力として評価されている本丸の高台地形の立ち上がり、あのボリューム感も出てきます。ここでは、ああいう松を残すことにこだわらないで、すっきり見せていく方がよいと思います。何人かの方に松の有無について意見を聞いてみても、残した方がよいというふうにこだわる人はほとんどいない。

ですから、できるところは思い切って整理していかないと、メリハリのきいた鮮やかな成果にはつながりにくい。今回の作業でより積極的な景観整備をしていくべき段階に入った、といえるのではないかと思います。

それから、天守前の残された松について木陰として有効だとする意見が出ていましたけれども、これは要するに、本丸としてどこにどういうふうな木陰をつくるか、これは回遊路、散策ルートとの関連で決まることであって、天守景観を遮蔽するような真ん中に木を置いて緑陰だというのは、こじつけ的な無理な擁護論になってしまう。やはり天守の見えるところはパッと開けてみせる。全国の天守閣のある城の本丸では、天守の正面はほとんどが開けてあります。明快に天守を望めます。姫路城本丸はほとんどオープンスペース天守を遮る木は1本もない。それをそのまま小田原に適用しようとは思いませんが、小田原城本丸は周囲に木陰になるような樹木が沢山あり、園路の設定次第で緑陰は十分にとれる。そういうプランニングは楽しい仕事の世界だと思います。やはりそういうメリハリのある思い切ったプランが進められる、植栽整理のプロがフリーハンドでどんどん仕事ができる、そういう環境のもとで整備にあたっていけることが大事だと思います。

なお、いま申し上げたことはあくまでも暫定的な整備の範囲の話です。本格的な整備は曲輪ごとに、遺構との話し合いの中で決まっていくことですから、今から予断はできません。暫定整備は暫定的に公園的としてきれいな見せ方をしていく。そういう暫定プランというものは立てることはできると思います。これからは、そういうことにも力点を置いて議論をしていかなければならないでしょう。

部会員 第1回のときに言ったんですけれども、緑の絶対量としては、公園ですら不足しているわけです。一部を切ったわけですから、環境の方でミティゲーション、代償措置という言葉があるんですが、切った分はどこかに補植なり、生育させていかなければ、全体として潤いのある、公園に入ったときに何となく潤いのある感じというものも大切だと思いますので、それが得られない。そのためには、上の方を切ったわけですから下の方に代償していく。それから、土壌の様子もきわめて劣悪だと感じています。いい公園などでは下に苔が生えて立派なものになりますので、木を切る処置と土壌を養生する、あるいは下層の苔とか草本類を補植するなどの措置を予算化して、次回ときには土壌とか下層植生と組み合わせて大胆な形で進めていただきたいと思います。

部会員 今のご意見についてですが、今ある園樹の絶対量を減らさないで1本切ったら1本植えるという前提を置かれると、造園改良計画も現場の作業も困難になります。今おっしゃっているように、なぜここに木が生えているかという、公園植栽として疑問とされるような木が多いので、それを整理しながら、城址公園にふさわしい方向に、植えなおしをしていくような作業をしなければならない。それは分量で量るのではなくて、やはり全体の配置などでバランスを考えていかないと。今の量がなぜ正しい量なのかと、何ゆえ正しい量だと言えるのか。その基準となる筋道は整理しておかないと、今の時点で樹木が増えたり減ったりするのがよいとかけしからんとか、そういう議論を短絡に持ち込むことには無理があります。

部会員 絶対量というのは、たぶん光合成量の絶対量を基準にするということになると思います。そこで、光合成の、単位面積当たりの植物が行う光合成量を補償する。ですから、下層植生、木のことだけでは考えていくわけにはいかない。

地域が決まればどういう地域で考えるか、大外郭全体で考えるかそこで考えるかで違ってきますから、自由度があるんですが、大きな視点で取ったときに、潤いのある環境というのは、やはりこの部会が立ち上がった当初からの問題、視点ですので、それはどの範囲を取るかは別として考えていく。絶対量は公園としては自分の感覚では足りないと考えています。

部会長 先生がいらればお聞きしたいところですが。

部会員 部会員の科学的な見地から、緑量の問題という、確かにそういうアプローチもあると思うんですが、私の立場は緑量があろうがあるまいが、その木がそこにあって初めてこの景観が成り立つとか、情緒的な世界があるんです。だから、下生えの問題をおっしゃっていますけれども、それはこれから計画の中に盛り込んでいく問題ですね。

今は、今現在ある景観を阻害している樹木を整理していく。それが、まず第一。ですから、先生がおっしゃっていましたが、本丸の3本をなぜ残したのかと。けれども、今は将来遺構の整備もあることですが、それまでに何もなくなってしまったら、これは公園としての雰囲気、機能が失われる。だから、できるだけ今ある木を生かした状態で残しておく。

部会長

部会員の考え、今あるものを大切にするので、風情を含めて手を入れられる範囲でよりよくしていくことをトライをしている、モデルとして積み上げていくということだと私は理解している。それで、私が言うのもなんだが、部会員の話は今までお城の植栽ないし公園だけではない、地被類とか、低木も含めた樹木量ということに対しての基準論というのを聞いたことが今までなくて、新しい考え方で取組んでいく必要があって、そういう観点も、これは部会員ずっと最初からそうおっしゃっていると私は理解しているが、それも重要な要素として、これから考えていく要素ではないのかな、今の段階で、ではどうかということに関して部会員は個人的なご意見はおっしゃったけれども、それを共通のものにするというための、何かが必要な気がします。全く意見はおっしゃるとおりだとは思う。

部会員

そのことに関連して言うと、そういうふうに御意見をおっしゃっていただくのは結構なのだが、光合成の話は今突然持ち込まれても、我々は何を手がかりに議論していいのか取り付く島がない。だから、もしそういうことをおっしゃるのであれば、日本でも世界でも構わないが、公園全体の光合成量の問題について公園に適用した色々データがあって、これはこういうことでやるんだというようなデータを紹介していただかないと、何をどう考えているのか見当がつかない。だから、しかもこういう公園にはこれくらいの光合成がなければいけないとか、こういうふうにあったほうがいいとか、色々なデータの提示があると思うが、緑の光合成という議論をいきなり城址公園問題に持ち込まれても、これはある意味都市の緑全体にかかわる問題でもあるし、その辺のバランスから考慮していかなければならない。

部会員

部会員がおっしゃるのは、そういう話ではなくて、小田原城の史跡公園の中で、三の丸（二の丸）広場などがあり、広場は多いんです。無植栽の広場というのは。今はそうでもないが、夏になって非常に暑くて居場所がないと言ったらいいのか、ただそういうところも史跡の中なので、新たな植栽は将来の植栽計画の中で考えていきたいと思いますという中で、実際上は本丸の広場もそうだし、御用米曲輪の広場もそうだし、全部が全部広場として無植栽の状態というのはやはり都市の公園の中の緑としてはちょっと不足なのかなあと僕は思います。あるいは、今でも木はあるけれども疎林み

たいになっていて、その下は昔は何かに使っていたところが完全に裸地化しているわけですね。それはやはり通路は通路なんだけれども、そうではないところは何らかの庭という感じの植栽があっただけだと思ふ。それは低木であったり草本であったり、場合によっては苔が繁茂しているような状況がよかったり、あるいはササが入れられたり、何かになっていたりとか、それは次の植栽計画の中での位置づけができてこないとなかなかやりにくいかなと思ふ。ただ今でも僕は広場の部分には、そういう低木でもいいから今の史跡の中でできることがあればやっていった方が多分市民的には緑の量が、こちらの方で修景的にやった方がこちらで増えているよというのが説明がしやすいのかなと思ふし、そういう意味で、先生はもうちょっとすっきりした方がいいと、確かにそういう部分はあるのかもしれないけれども、先生が今回やられたみたいに、今あるものをできる限り残しながら上手に生かして木陰も残し、潤いも残しながら景色もよくなる、方向性としてはそれが僕はいいいんじゃないかなと思ふのです。

部会長
部会員

今までご発言のない方で、誰か。

ちょっと、補足を。山の仕事をしていると木を切ったら次の年には全く違ってくるので、切るのと下のことは同時に考えないと森林とかは木の管理ができない。切った分日陰がなくなって水分がなくなって、もしかしたら木に悪い影響を与えるかもしれないので、だから切るのと下層というのは一緒に考えてモデルを作っていくないと木のためにも景観のためにも全然ならないということを知っておいてもらいたい。

部会長
部会員

基本方向として皆さん御理解していると思ふ。

そうではなくて、順番に、それはまた後でと言われると、それが困るということで、木を切る計画を立てたと同時に下層植生の計画を立てて手を入れていただきたいということです。

部会長
部会員

はい。

まあそういう理想的な、今私が担当したものはこれがあると周りの木にも影響があるからこれは切った方がいいとか、あるいは周りの木の枝下しをしようというのは、やはり下層植栽にするための日照加減もある程度は考えますよね。ただそれはやはり役所の年次計画の予算に応じた作業が決められているわけだから、同時に下からやってもそれが将来にわたって永續して残るとかというものではなくて、本丸の三本の松の下も将来どうなるかわかりませんよね。ですから、山の環境とこういうところの関係とは大分違うと思ふので、その辺も考えて。

部会長

確認しながら、これからですよ。発言のない部会員とかは、もし御意見があれば。

部会員

私この植栽専門部会の位置づけが非常に曖昧というところもあって、何を定める部会なのか、何というかはっきりしていないように感じている中で発言するのはすごく難しいと感じている。まず、今回去年の11月に整理した木については、これは第1弾としては大成功、非常によい仕事をしていただいたなと私は考えている。で、そうして見晴らしがよくなるとまた別のところが目についてくるのだが、それはまた第1弾の後に出てきたもので、これはおいおいと対処していけばいいだけのことだな、と考えています。で、まずこの部会が現状の邪魔になっているような木を、また見苦しいような植栽を整理するだけの部会なのか、それとも将来の城址公園全体の植栽まで踏み込んで発言していい部会なのかどうかもまだはっきりしていないと思うが、何をするにしてもビューポイントを決めてそれに沿ってじゃあどうしましょうかというのを話し合っていく会なのか、史跡整備委員会の方で出された将来計画に基づいて、じゃあどうしましょうかということを考えていく部会なのか、まずこの辺をしっかりと決めていかなければいけないかなど。また、そういったことをどちらにせよ、そういった手法で進んでいくにしても、まず城址公園の場所場所に、それが例えば本丸、本丸は江戸時代はこういう姿であった、江戸時代の建物を復元、石垣や本丸御殿を復元すると将来こういったイメージになります、本丸には常盤木門だけではなくて、鉄門という門もあって、そういったイメージについても、この部会で色々な植栽を考えるにしても地下の遺構などを考えるにしても、そういったもの考えたうえで長期計画、短期計画を考えていかなければいけないと思う。ですので、本丸にしても、本丸、旧城内小学校のあった二の丸、御用米曲輪、南曲輪がかつてどんなかっこうで、そこには櫓があったのか、なかったのか、地下には、ここには木が植わっているけれども、本当は地下に遺構があるのだ、木の下にはお堀があるんだ、ということも、一回この部会の中で共通認識として共有してから色々な話を進めていかないと、それぞれの、城郭の専門家、植物の専門家の中でちょっとまだわからないことがお互いにあるので、そういったことをこの場でレクチャーしながら進めていかなければいけないのではないかなど思っている。

部会長

進め方がはっきりしないとおっしゃる。

部会員

部会員からこの部会の性格がわからないと、それではちょっと困ると思う。ここは市の方が大方針として史跡と緑を共生させたいという方針の下にこの部会はでき上がったわけなので、かつて同じようなこういう専門家、学識経験者と呼ばれる人たちと市民の代表も加わった植栽管理計画が出た。あれは文字通り書いてあるように歴史的景観と遺構の保全のための植栽管

理計画。ですから、ここは国の史跡指定であるということは我々も十分承知しているが、ただ単に史跡指定だから天守閣や常盤木門がすっきり見えるのが正しいやり方なのだと。私もすっきり見えるポイントがあつていいとは思いますが、あの短期計画だと8箇所からすっきり見せると。そうすると日本語に四方八方という言葉があるが、ほぼ360°天守閣は、というようなことになると、それを遮っている樹木を切るのが正しいという基本的な考え方である管理計画はできた。それに対して、我々は中心部にこれだけのまとまった緑を供給している唯一の場所ではないかと、そこであれだけの緑を取り除くということは小田原の街づくりからしても問題だろうという運動提起を行って、その結果、第1次の植栽管理計画が案を出したものを、また同じような学識経験者と呼ばれる人たちと市民の代表で何のために2回目を作ったのか。それは、1回目の計画にやはり色々問題があつたからこそ2回目のできたので、史跡と緑を共生させるという市の大方針の下に我々は仕事をまかされているのであって、そのあたりがよくわからないっていうのではちょっと困るなと思う。史跡と緑の共生というのはなかなか美しい言葉だが、実際にそれをどうするかということは、非常にこれは大変苦勞のいるところで、我々は中心部にこれだけまとまった緑を残している唯一の場所だから、そのあたりはかなり力点を、あるいは史跡の専門の方は地下の遺構こそ大事なんだから上に生えている木はそれに影響を与えるおそれがあるから切るのは当たり前、このあたりをどう落としどころをつけるかという話でしか多分ないのだろうと思う。私も発言なんかしようと思わなかったが、やはり植栽専門部会自体が史跡と緑を共生させるという市の大方針の下に置かれているということ、何だか方向がわからないでやっているみたいなのを言われるとちょっと発言したくなりました。

部会長
部会員

ほかに。

この部会の意味がわからないとか、史跡と緑の共生までもわからなかったのかと言われるとそんなことはないわけで、そんなことは百も承知です。で、まず何しろ小田原城の全体の将来計画を考えるには、やはり小田原城の復元計画がどうなっているのか、ということもそうなんです、小田原城の価値というのは一体どれほどのものなのか、植栽管理計画を考えるには、まずその場所がどれだけの価値があつてどのような方向付けをされている場所なのかということがやはりわからないと、これは切っていく、これは切っちゃいけない、これはかわいそうだ、と言っていたのでは、それは50年、100年の計にはならない。そういった意味で色々な植物等の専門家がいる中で、足並みを、前提知識をそろえましょうといった意味で、

私はまず勉強してはどうか、と言ったものです。この小田原城という場所を50年先どうするか、100年先どうするかをまず考えましょう、ということです。それがわからなければ、この木を切っていい、この木は切っちゃいけない、ここに補植をしていいかどうか、といったことまでわからない。やはりもっと大きな目で、大きなもっと上の位置、50年先、100年先という小田原城の価値、小田原というのは日本、世界から見てどうしたらいいのか。小田原市民にとって最大の利益をもたらすような環境にするにはどうしたらいいのか、といった位置から本当は考えていかなければいけないと考えている。

部会長 時間があって、もう一つ議題がある。で、今4時です。あと1時間かけても5時になる。そろそろ終息にしたいので、本当に手短かに意見があるものは出していただきたい。本当に短くお願いします。

部会員 2点申し上げる。今、部会員が言ったビューポイントの件についていえば、7箇所だか、8箇所だったかそれを全部合わせると360°見えるように伐採するという主張であるかのような話に仕立てられているが、これはとんでもない曲解というもので、私の説明を全く無視した難癖論の世界です。そんなものではありません。私がビューポイントとしてあげた展望の範囲は、360°のうち90°になるかならないかで、その程度の限定された世界です。だから視野を定めてこのポイントだけをやりましょう、こういうポイントをやりましょうと言ってきた。報告書の真意を確認せずに360°切り払うなんて、一方的にそういう言い方をしてもらっては困ります。報告書にそんなことは書いてありませんし、ひどい曲解です。ですから、今後は決してそういう言い方をなさらないでいただきたい。それから、緑と遺跡の共生についてですが、緑と遺跡を対立軸として優位を争ったら話はまとまりません。こんなことは有り得ない話。城址公園は本来城と緑のコラボレーションで景観を創り出さなければならない。城の掘って立つところは遺構ですから、やはり基本的に遺構を大事にして、城跡景観を引き立てていく緑を育て、その結果城も緑も所を得てバランスよく共生するという、美的な世界が成立するわけです。こういう秩序立てを回復するという視点を持たないと形にならない。城址公園を2分して右側は緑に、左はお城にして共生としましょう、そんなことは都市公園プランとしてあり得ないことです。やはりもう少し常識的に落としどころを見つけられるような方向での議論が大事だと思います。

部会長 本質的に同じことを違う方向から話しているような気もするが、おっしゃったとおり緑と歴史の共生ということは、この会の基本だというふうに私も理解しているし、皆さんもそう理解いただいていると思います。そこ

で、実際にそれを具体化して個々のアクションを一つ一つ積み上げていかなければいけないというのが現状ですが、その際にやはりこの植栽専門部会の中で一つ一つ確かめて、色々な変化を読み込んで実は足りないことがまだまだたくさんあると思う。先生の現場のお話でも、人が歩くところがどこなんだということが、ビューポイントのこともあるけれども、まだまだはっきりしていない。そこは片方で言うと、下にいろいろなものが眠っていますから、そんなに簡単に決められないよ、ということも現実にあると思うのだが、そういうまさに全体をどうするかということに関して不足がありながら、現時点で現在あるものをどう変えていくかということの方角として、今みんなで取組んでいるんだということが、正しいというよりも、今の状況だというふうに感じます。それに関して、いろいろな観点で皆さんそれぞれ微妙に意見が、立ち位置とか専門性とかそういうことによって違ってくることがあり、それで色々な観点がこれからも必要だし、という発言がずっと続いています。ただ、それを全部そろえて、全体構想から植栽計画も管理計画も最終版みたいなものを作ってやるという、悠長なと言ってはちょっと語弊がありますが、最も望ましいかもしれないが、現実的な判断を積み上げていくというふうに考えて、それで少しずつ長期の姿を解きほぐしていくという方向でしか、この専門部会は機能しないというふうに思う。言ってみれば、皆さん悩みながら先生も現場のお話で色々悩みながら今こういう判断をしたという、一方でモデル修景という言葉もあるように、そういうことを積み上げていっているのが今の状況だというふうに思う。それに関しての基本方向は、この小田原の緑を状況をよくしていくということがまずあって、それには植物としての生育環境の問題もあるし、景観とか見え方ということもあるし、そのほか様々な観点があると正直思います。別の言い方をすると、こういうモデルをさらに続けながら色々な問題を見つけ出して、それに対してそれぞれの判断を積み重ねていく。まあそればかりでは多分部会員がおっしゃっているようなことに関しては不足する部分もあるので、そこに関しては、新たな視点も色々な形で組み入れて判断材料を多様化していくというふうにもっていきたいと思う。そのためにもやはり今回、全体としては今回のモデル整理は効果があった、大成功であったというのが基本だということを感じるし、そこに関しては異論がないと思う。ですから、そういう方向でそれこそ専門的な判断を積み上げて、やはりこれを積み上げていくというふうに、この場はまとめておきたいというふうに思う。実際には部会員と観光課あるいは文化財課もそうだろうし、いろいろどうしていくかということも含め、次どこを取り上げていくかということも含め現在の取組の延長上をさらにいい

方向に持っていきたいというふうに思うので、皆さんご賛同いただけると思うので、多少歩きながらというところはあるとして、皆さんの御協力を得てさらに進めたいというふうにまとめますが、いかかでしょうか、よろしいでしょうか。ということで、また次回ここでモデル修景今後どう進めるか。その際の反省点、色々な御意見があった。事務局の質問に対しても色々な意見があった。ではどうするのかとか、そういうことも含めて、この場ではもう時間がないのでお答えをいただかないが、次回まとめてそこは整理をしていただければというふうに思う。議題の1はそういうふうにして、議題の2に移りたいと思う。

(2) 御用米曲輪の整備について(御用米曲輪北東土塁クスノキの取扱いについて)

部会長 議題の1はそういうふうにして、議題の2に移りたいと思う。よろしく
事務局 お願いする。事務局から説明を求めます。

事務局 現場を見ていただき、最初に前提となる遺跡の状況について簡単にまとめさせていただきます。資料3を御覧いただきたいと思う。資料3には現在の調査の進捗状況、ちょっと前の状況だが、それから2番として、これまでの成果というのを箇条書きとしてあげさせていただいている。大きくは御覧いただいた近世の蔵跡が見つかったこと、それから現在遺構保護のために埋め戻しを行っているが、瓦積み塀が見つかったこと、それから戦国期の礎石建物跡が見つかったこと、戦国期の庭の跡、また当時戦国時代の御用米曲輪の形や規模がわかったことということが調査成果としてあげられている。それら調査成果を受けて整備の方向と今後の課題を最後につけさせてもらったが、これまで御用米曲輪については近世幕末期の調査方針ということで、作業を進めてきたところだが、戦国期の遺構があまりにも状態がよいということで、戦国期の遺構を生かした整備計画を考える必要があるのではないかということで、現在調査・整備委員会に諮り、文化庁とも協議しているところである。それを踏まえて今後さらに調査範囲を拡大して来年度も調査を進めていく予定になっているが、平場の整備計画についてもこれまでの蔵跡を平面表示するという方向から白紙とは言わないまでも1回置いて、戦国時代の整備を考えていくというようなことが今後の調査と整備の方向性として今事務局で検討していることになる。それを踏まえて実施計画ということになるろうかと思う。

部会長 1点だけ私から確認したいのだが、御用米曲輪の設計は一応終わったのだが、今白紙とはいえないけどとおっしゃったが、現実にはやり直しですね。

- 事務局 近世の曲輪の範囲については元々曲輪取りをはっきりさせるという整備の方向性については生きたまま、近世の曲輪を復元する。戦国時代の曲輪取りを復元すると、御覧いただいたように、さらに山を付け足さなければいけないこと、また、議論になっているクスノキのある土塁も更地になってしまうという状況もありますので、曲輪の範囲については近世の曲輪取りで整備をするという方向で文化庁とは調整を進めているところである。曲輪の中の整備方針をどうするかということで、今後の調査を進めて検討するというふうになります。
- 部会長 まあそういう部分はあっても、わかりやすく言うと大幅なやり直しですね。
- 事務局 大幅なやり直しになってくる。
- 部会長 別に責任をとれ、ということではない。
- 事務局 御用米曲輪の曲輪取り、輪郭の部分は江戸期の姿なので、それは実施設計の考え方に変わりはない。ただ平場の部分については、江戸期の蔵の平面表示ということで、あとは広場的な使い方ができるようにというのが今の実施設計だが、それだけでは収まらないということで、ただどういう形で戦国期のものをそこで見せていけるかどうかということがあるので、それに平場の部分については大幅に変わってくる可能性が高くなっているということだ。
- 部会長 遺構が存在する場合の整備計画というのは大筋そういうものでありまして、いったん決めても、ある事実がわかると、ほとんど全部白紙に戻るといったんやり直しとなるのが、僕は普通のことだというふうに理解しているので、別に補助金がどうだとか、そういうことではなくて、そういうカラーで常にものを考えていかないと、いったん決めただけ、いつ変わってもおかしくないというくらいに私はずっと思っていた。それが現実ここで起きているというふうに考えてよろしいんだねと申し上げたかった。
- 部会員 関連して質問だが、結局ここに、観光客がこの平場に入ってくるのは現時点では未定なのか？
- 事務局 未定である。
- 部会員 そうすると、この観光客が入ることを前提にして、形を、木の切り方を考えているが、そこもまた条件が変わってくるということか。
- 事務局 いずれにしても御用米曲輪自体は史跡として、遺構も何らかの形で見せながら観光客にもそこに入らせていただくというところではあるので、そういう面では、北東土塁、まわりの環境については同じように市街地側に対する遮蔽効果というものも考える必要があると思っているし、そういう面でこれからご説明する北東土塁の植栽管理の実施計画についても、そのの

部分については、平場がどういう見せ方になるかというところとは切り離して、あまり影響がないのかなというふうに事務局としては考えている。

部会員

話がややこしくなるが、事務局が言うような単純な区分けで割り切れればよいというわけにはいかないと思う。今回検出された遺構をどう見せるか、また北東土塁もその上の蔵跡も立派な遺構だから、保存しながらいかに見せるかという課題は同じわけだから。曲輪面の方は遺構として見せるが、こっちは別物という分け方でなく、遺構の全体像が明らかになったところで、トータルとしてどういう整備が可能かということです。現実に向き合いながら、頭を柔らかくして計画を立てていかなければならない。最終的には、大勢の来訪客に最良の成果を楽しんでいただけるような、史跡と緑が共生する気持ちのいい空間を創ることでしょう。・・・

部会長

その中で歴史と共生する。まさにそうだと思う。じゃあ先に進めよう。資料4の説明をお願いします。そういうことで、よろしいか。

事務局

北東土塁の植栽管理の実施計画案についてご説明する。今、部会員からも全体の中で考えるべきだというご意見もあった。一方では、調査等が終わらないとそういうものが検討できないというところもある。そうすると先延ばしというところにもなってしまうところもあり、北東土塁についてはある程度整備をしていこうというところの、どういう整備をしていくかについては、昨年来ご議論いただいているが、そういう方向で、何らか良い生育環境ではない、ということのご理解は皆さんいただいていると思っており、それに基づき少し進めて行きたいということで、この実施計画をもう一度整理をした。資料4だが、こちらはこれまで北東土塁の主としてクスノキの取扱いについて事務局案をご提示して何回かご議論いただく中で、段階的な実施とか補植の検討も含めた遮蔽効果の確保などの考えを加えるとといった修正を行ってきたので、これらをひとつに整理をしたものだ。また、これには1番の北東土塁付近の植栽の現況についてとか2番の北東土塁付近の遺構の状況についてとか、といった説明も加えてあるが、今後市民に説明していく場合にもこのような現況の説明も含めて行っていく必要があると考えて作成したものだ。まず、1の北東土塁付近の植栽の現況についてだが、北東土塁上のクスノキと(2)、(3)で簡単にまとめてあるが、北側法面の常緑樹の高木、同じく落葉樹の高木について現況を載せてある。合わせてクスノキについては、その樹叢が果たしている遮蔽効果等の評価できる点と地下遺構への影響といった問題点を整理してある。次に2ページ目、2の北東土塁付近の遺構の状況として、発掘調査の結果をふまえ、土塁、蔵跡、水路跡、北側法面の状況を整理してある。土塁については砂や小石、粘土や瓦を交互に積み上げて作り上げ、土塁上にあった

蔵を支えるために頑丈な作りとなっていることが確認できている。土塁が作られた時期については江戸時代以降であることが確認できた。また、土塁の南西部分、御用米曲輪の平場側の内側の部分だが、ここは野球場の造成により、切削されているが、その下の遺構や地質をもとに、曲輪の内側の土塁の一番裾の部分の位置も確認できている。次に蔵跡につきましては何回か現地でご覧いただいたが、拳大から人頭大ぐらいの大きさの石を溝状に掘り込んだ穴に敷き詰めて、布基礎と呼ばれる形にしたものが確認されており、蔵1から3までの位置がほぼ明確になった。蔵の基礎は比較的良好にその位置をとどめているが、クスノキの根が石列上に根があるところがあり、一部は攪乱されている。このほか蔵2と3の間に江戸時代の水路跡、土塁の南東の弓道場の近くから江戸時代又は戦国時代の水路跡が確認された。また、土塁の北側法面については当時の法面はより急勾配で、現在の法面はその上に厚く土が覆っているような状態ではないかと考えられる。こうした現況を元に3として史跡と緑の共生を実現するための基本方針をのせている。①から③までは前回までの事務局案でも記載されていたが、このうち北東土塁については過密な状態で巨木となっているクスノキの生育環境を改善しながら管理していくことが重要と考えられることから順序を入れ替えて①にクスノキの生育環境が改善される状態にしていくことということあげている。また④については前回までの事務局案にあった5年後10年後のイメージを想定することの次に、では想定してどうしていくかということで、クスノキの生育環境としても史跡の遺構、景観としても現状より大幅に改善されるものとするということを追加している。次に⑤と⑥は追加した項目だが、⑤は市民が親しんでいる緑の景観が急激に変化することのないよう時間をかけて手入れすることによって、よりよい緑に生まれ変わらせるイメージで考え、段階的に整備していくこと、というもので、この考え方は前回までの議論の中でも出させていたが、改めて基本方針の中に入れたものである。最後に⑥としてよい景観にするためには時間もかかることから作り出そうとする景観のイメージの周知を図る必要があるということをつけ加えたものである。なおその下に緑と遺構との関係について整理してあるが、史跡の遺構については土地の形状、形を示すとともに生活や社会についての情報を残しているものであり、できる限りそのままの状態の後世に伝えていくべきものである一方、御用米曲輪の緑はこの間の管理が不十分であったことなどにより密生状態にあるものの、この景観に親しんでいる市民もいることから、こうした状況の中で史跡と緑の共生を図るためには、長期的には本来あるべき史跡の景観を想定してこれに向けた対応をしていくとともに、短期的には

遺構に影響を与えている樹木の中でも遺構が持っている情報が大きく損なわれる可能性が高いものについて、伐採等を行って、遺構の持つ情報の保護を図ることとしている。そのうえで具体的には蔵跡の基礎の石列については蔵の位置を示すだけでなく、建築方法などについて検討する際の重要な資料となりえるものであることからできる限り現状の状態を保って後世に向けて保存する必要があるとし、土塁についてはその顕在化、顕在化というのはわかるようにするとか見えるようにするという意味だが、顕在化を図るとともに、土塁上の樹木の高さの切り詰め等を行って土塁への負荷がこれ以上高まらないような措置を行ったうえで長期的には土塁上のクスノキが枯死するとかいった時点をとらえ、北側法面を生かした他の樹種への遮蔽効果の置き換えなどを行うことで土塁への影響を軽くしていくとしている。次に4の具体的な実施計画だが、伐採の対象とするクスノキの本数や、3段階で実施することについては前回までの事務局案と変更はないが、前回の会議で全体の期間はもっと短くできるのではないかという意見がかなり多かったことから、第2段階の実施時期について第1段階実施後前回では5年後としていたが、3年から5年後というふうに幅をもたせるとともにその実施にあたっては植栽専門部会でその時点での他のクスノキの生育状況や遺構への影響の度合いなど、第1段階実施後の状況を確認したうえで実施時期について再度検討することとしている。その意味で3年から5年ということにしている。また第3段階の実施にあたっては同様に第2段階実施後の状況を確認したうえで実施することとしている。また第3段階実施後の長期的な取組としての部分では北東土塁上のクスノキが枯死または病変などによる生育の著しい悪化、あるいは傾斜、斜めに傾いていくということにより倒木の危険性が高まった場合は来場者の安全や遺構の保護を考慮し、北側法面を生かした他の樹種による遮蔽効果の置き換えと、悪化した樹木については場合によっては伐採を行ってそれを北側の法面を生かした遮蔽効果に置き換えるようなことを行うことで中期的に遺構への影響を減らしていくこととするとしている。その下に、5ページだが、参考資料として段階ごとに伐採するクスノキについて、樹木の生育環境のみで伐採するものと、遺構への影響を考慮して伐採するものと、その両者を考慮して伐採するものに整理した表を載せているが、こちらについてはそれぞれの木だけを見た場合にはこのような要素で選定したということだが、最終的にはただ今御説明したように遮蔽効果が確保されることなど全体の樹叢としての姿を考えて決定をしているので、1本1本だけで決定したものでないことを御理解いただきたい。次のページ以降にA3版で横長で2枚図がついているが、最初のもは前回までと同じくそれぞれの段階別の

クスノキの取り扱いを示したものである。次に2枚目の図は第3段階までを実施した後にクスノキが根を中心に円状に枝を横に伸ばした状態でどちらかの日が当たるところだけ間を縫って枝を伸ばすのではなく、まわりに等しく枝が伸びるような状態にということで理想的になったというようにしていくというようなことを想定した形で全体の樹叢としてどうなるかのイメージを示したものだ。薄い緑でクスノキのそれぞれのところに円を描いているが、そういったものがつながっていくと15本のクスノキの伐採があったとしても遮蔽効果がある程度確保されるのではないかと、つながっていくのではないかとということ、それから北側の法面にブルーの斜線で示したものが何本かある。これはちょっと見えづらくなっているところもあるが、7本ほど塗ってあるのだが、こちらについてはこういった部分に常緑樹の補植を行っていくとクスノキの部分と合わさって遮蔽効果が確保できるのではなかろうかということ、これはまだ科学的に太さがどうだということをやったわけではなくフリーハンドで書いているからイメージとしてとらえていただければと思うのだが、こういうような形で伐採を3段階で行った場合でも緑について一定程度確保できていくのではなかろうかというイメージを示したものだ。先ほど委員からもあったように、事務局としても史跡と緑の共生は大変難しい課題であると思っており、長期的に史跡としての景観を整えていくことを考えながら、緑としてもよい景観を作っていくという考えを持って段階的に取組んでいくと。また、それぞれの段階で状況を確認しながら行っていくということでこの難しい課題を乗り越えていくということでこの案をまとめている。植栽や遺構についての現状の認識、1番2番の部分になるが、その部分も含めて基本方針、実施計画案と具体的にぜひ御意見をいただければと思う。よろしく願います。

事務局

引き続き資料の2としている今後の御用米曲輪の植栽に関する流れのほうについても私の方からご説明させていただく。この表だが、北東土塁上のクスノキの取扱いを含めた御用米曲輪の植栽に関する流れをそれぞれの場所ごとに表現したもので、一番下の欄にある史跡整備全体の流れと併せて御覧いただきたい。先ほど説明させていただいたように、発掘調査のほうでは戦国時代の重要な遺構が確認されており、こういったことなどから当初の予定と変わって来年度も発掘調査を実施するなど、予定にズレが生じてきている。現時点では整備の完了を仮に平成30年度と想定しているが、このため修景整備工事においてもこの期間内において、国・県の補助金をいただきながら進められていくと、そういうふうにご理解をいただきたいと考える。植栽専門部会だが、先ほどらいちょっと意見もあったが、

下の２段目の欄になる、植栽専門部会は平成３３年ころまではおおむね年に２回から４回程度継続して開催し、御指導をいただいでいくというような流れで考えている。先ほどらい御議論があったように御用米曲輪の御議論をいただいでだけではなくて、全体の植栽計画について色々御意見をいただき、最終的には全体の整備計画とコミットさせる。それだけの大きい仕事がある。なかなか御議論いただく時間のこともあり現在は暫定的な整備のお話を中心とした話題、それと御用米曲輪の話題になっているが、この流れがある程度落ち着いてきたところではそちら全体のことについての御議論をいただいで、そういう考えでいるのでよろしく願います。ここで任期が改まったが、２年間という任期でそういった議論がある程度まとまていくまでは引き続き御議論をお願いしたいということである。それから上のほうに追っていただき、上から２段目だがこれが北東土塁の部分である。今御説明ありましたクスノキの取扱いについても３段階で表示されているが、２段階目が５年後とここでは表現されているが、先ほどは３年から５年と申し上げた。これは一番かかった場合でも一番下の史跡整備事業の範囲の中で収まるので、少し生臭い話になるが、第２段階の作業についても国庫補助でできる見込みであるということをお理解いただきたくてそうになっている。その点御理解いただきたいと思う。それからこの第２段目を一番右に追っていただくと矢印が上を向いて、一番上の四角のところの説明があるが、全体のことになるが５０年から１００年の単位で、先ほど説明があったが、クスノキ自体の生育状況も考慮しながら北側の法面に樹木を置き換えて遮蔽効果も置き換えていくんだと、そういう方向性を持っている中でここ数年の動きと御理解いただければと思う。そのほか、一番上の欄が北東土塁の北側の法面について表示してあるものである。２５年度には補植箇所の検討、剪定方法の検討、危険樹木等の精査を行い、２６年度にはそれへの対処とともに先ほど御説明した補植の実施、そういったことを行い平成３０年頃には第２段階の流れの中で全体の剪定等を実施してさらに整えていく。定期的にそのような作業を行っていくというような説明となっている。それから３段目の平場部分だが、ここは来年度さらに遺構の状況を確認するための調査が行なわれていくが、そういった検出されてくる遺構のあり方と併せて補植の可能な場所はないか、緑陰をどこに確保するかという議論をさらに煮詰めてまいりたいと思っている。そして平成２６年度に補植等の箇所の選定、補植等の樹種の選定、地被植物等の選定という作業を行い、平成２９年度頃整備工事がだいたい仕上がってくる中で補植の実施ということを考えている。同様に天守閣側の南側法面とか他の部分の法面についてもほぼ同様の流れで、来年度が危険樹木等

の精査それで26年度はそういったものへの対処といった流れで作業を進め、同じく29年度頃に全体を整えていくような形の整備工事になると思うが補植を実施する、こういったイメージで現在は考えているということになる。こちらのスケジュール表についての説明は以上である。(1:28:15)

部会長

今4時35分なので、はじめの目標の5時はきついかもしれないけれどもなるべく早目の終了を目指してやりましょう。部会員は何か御用事があるということで退席されるので、何か意見があれば一言だけでも。

部会員

この次の少し時間があるときにお話する。今日は失礼する。(退席)

部会長

それでは説明に対して何か御意見は。

部会員

懸念があると申し上げる。緑について急激に変化することがないように間引きを行うということなのだが、このことが根本的に林業でやっている間伐枝打ちの方式でだんだん太らせていく手法そのものになってしまっている。そうするとこのやり方で行けば、木と木の間の光合成量は一定だから木だけが太って下はいつまでも暗いまま何の変化も起こらないままますます遺構を傷つけていくというというへたをしたら一番悪い方法になりかねないという懸念がある。全体の木の幹の面積というのは一定のところの面積当たりで決まっているので、そうすると段階的にやるというのが一番悪くなってしまう可能性があるという懸念がちょっとある。

事務局

部会長。おっしゃるように段階に対しての懸念というのは前回もいただいていたかと思う。そこは確かにあるが、ただ実際のところでやはり今までの議論の中でいった時に市民の方の景観に対しての見方、そういうものも考えながらおかつ実際にも今日見ていただいたようにクスノキのところでも全体に過密な中でも非常に過密なところと横に一列のようなところとかなり今日のところでも土塁上に光が差しているようなところもあった。そういったところで難しい中なのだけれども部会員などのあるいは部会員などのお知恵も借りながら何とかこういう中でできることをやっていく必要があるのかなというふうに考えている。ですから特に第1段階については特に土塁の中の先ほど現場でも御説明したがクスノキが3列にわたって土塁の上に並んでいる蔵3というところになるがその部分は非常に薄暗くなっているのでそういうところの伐採、間引きを主体にまず取組んでいくというようなところである。

部会長

ほかに発言は。

部会員

薄暗くするところを明るくするのは木を殺せということに直接なるから、薄暗いところと明るいところがあるというバリエーションを作ったほうがまだましという可能性だ。それからもうひとつさっき質問したのはこれの平面部分と交換という時期と兼ね合わせて例えばそれが延びるということ

であれば直接見えるということがなくなるのでもう少し時期を早めてその後の生育を待つという可能性も出てくるので、そこらへんを考えると例えば第2段階を第1段階のところに持ってくる位のことでいいのではないかと思う。

部会員

今の部会員の意見は私もよくわかります。入れ替えというか、どういう樹種に転換をしていくかという段取りとかスケジュールが見えない状態なんだ。事務局案はちょっと枝を切ってもその枝が茂るのを待つという、元と同じ状況をまた作り出してしまうということにしかならない。それでその下の土墨上の整備とか、周辺の樹木への影響とか、それから樹木を仮に入れ替えるなら植え替えのための環境をどう整えるべきか、そういう問題意識がこの中には全く想定も設定もされていないわけです。で、北西土墨上のクスノキ群の北側の樹林帯の一部を、常緑樹に入れ替えると提案されていることですが、それはできるのかもしれないけれども、現在のような鬱蒼と繁茂したクスノキの下では、基本的に非常に育ちにくいですね。これでは決して計画の実現にはつながらない。こういう公園樹林の総括的な変換を求める場合は、その作業条件にあわせて思い切って整理するものは整理して、次の仕事ができるようなフィールド環境を的確に整えていくということにしないと、実際の仕事にならない。それなのに樹木整理のインターバルを最短でも8年間かけるとしている。15本のクスノキを切るのに8年間もかけるなんて、これでは何の成果にも期待できない。仕事のうちに入らない。成果の実体が見えない作業の費用見積を植木屋さんに頼んでも、これでは見積が出せないでしょう。そういう事務局案です。この案は、次への転換を実際にどういうふうにするのか、専門家にどういう相談をしていけばよいのか、事前にそういう検討してプランを作ったのでしょうか。あるいは、文化財課の都合だけを優先してこのように設定したのか。事務局案には現場の整備をリアリティーのある計画に基づいて実施していくという、具体的な段取りが全く示されていない。こんなレベルの内容では全くの落第点です。とても承認できない。

部会員

いいですか。私の方でちょっと言いたいのは、第1段階でまず被圧されて生育のよくない木を切るという、これはもう問題はない。ただこの第1段階で全体の樹冠を詰めるという作業が入っている。で、これは4分の3くらいと言うが木の生育そのものを太いところで途中からばさっと切るしかないのだ、詰めるということは。で1年に1m伸びるか伸びないかでやっていくと3、4年ですぐ5mくらいになってしまう話なのだ。だから最初に4分の3の太いところを切るのではなくて、もう少し下で求める景観の高さを最終的に何mにしようかということで切っていただければよ

ろしいかなど。枝分かれして上のほうの枝も十分に広がると。最初から目標にするところの高さで太いところ切りますとそこから枝分かれするのはその上だから、また姿がおかしくなっていくということなのだ。それで第1段階で頭を全部止めるので、大きな枝張りは頂部の樹冠なのだ。途中からはほとんど横に伸びる枝が出ていない。で、もう1回芽を吹かすという工程が入るのですね。ですから第1段階で8本ですか、8本だけ切るのではなくて、頭を全部飛ばしちゃいますよという話を承知をしておいていただければ景色は上の方がざわざわしているところがなくなって、下のほうからも萌芽が行われる、そういう認識をしておいていただきたい。それにはまた3年から4年かかって横にも広がっていくよ、と。その間に混んでいる木を第2段階で切りましょうということなので、その辺の御理解をしておいていただかないと。ただ上まで残して第2段階を迎えるということではないということだ。

部会長
部会員

それはそういう御説明だったと思う。

そうなんです。だから第1段階と第2段階を合わせて切ってもよいのだが、第1段階で頭を落とすとかなり空間が空いてしまうと、それを少しでも和らげようということで、ちょっと間を置いて第2段階を切ったらいいかがかというのがこの案なのだ。それを枝張りがほとんどなくなってしまうということを御理解していただくとあまり一気にやってしまうとすかさずかに間が空いてしまうのではないかと、私は危惧を持っているのだ。ですからこういう案ではどうかなど。私からすればやはり頭を飛ばした場合に、それから芽が吹いて横が広がってくる年数というのがまあ3年から5年間ぐらいあるのではないかなど。で、早ければ早いほど第2段階を詰めても差し支えないのではないかなどということなのだ。成長がよければ第2段階を3年で前倒しのできるのではないのかなどということなのだ。

部会長
部会員
部会長

見ながらやっていかなければならない、ということですよ。

そうですね。

全体としては緑の環境を、今の悪い状況をよくする話で考えておられると思う。遺構がらみの色々なことはあるけれども、やはり今ある緑の質を極端に低下させない、あるいは隙間だらけになってしまうということはどうも全体の判断としては、この部会としてもしにくい。その生育状況を見ながら進めていく際に色々な知恵をそこに入れなければいけないし、早まることもあるし、樹冠の生育そのものも保持しながら進めていかなければいけない、そういうお話です。

部会員

難しい(課題だ)。だから、移植した影響で、本来ならこのそばにあるクスノキみたいに(郷土文化館前のクスノキ)、見事な枝張りが出るわけだ。

ところが密植されたからこっちも負けまいと思って、上へ上へと伸びてしまったものだから、みんな直幹のああいいう樹形になってしまったのだ。もっと早いうちに切って、脇の枝を出しながら伸ばしていったらそのようになったのだが、何せ密植されているので、そういう状態になってしまったのだ。だからこれはここにいる誰の責任でもないのだ。だから、そういう状況のものを人為的にこれを元に戻そうということこれは相当間引かないととてもとても駄目だ。でも、そうかといって今これだけの緑の量と背後の方の景観を隠して御用米曲輪もそうだが天守の方から緑の壁になっているわけだ。だからそれを（ばさばさと？）切って（枝を）出し直してという考え方とそれから混んでいるところを抜いておいてそれでなお丈を詰めるものとまだ並べて切ってしまうと穴が開くので前後を見て隣はある程度茂っているのは次の年にして、間を抜いて高さを調節してやるという方法もある。だからその方法をどうしたらいいかという。遺跡の関係というのが非常に大きい、これは。

部会員

木はどう切ろうと一定の面積に一定の光合成量になってくるので、一目瞭然で何年かかるか計画がわかるわけだ。それから見るとこの計画書ではまた鬱蒼とした暗いものにしかこのままだとまらない。それでこういう計画（でいいのか）ということになる。だから上からの図を見て、いつも木は一定の面積になるように育っていくので、そのことを考えて景観のメリハリをつけるのだったらどこかにギャップみたいなものを、貴重な遺跡のところにもちょうどいいギャップを作るみたいな形を計画しないとこのままではいつまでもどう切ろうと鬱蒼とした森が続いていくということになる。

部会長

ギャップとおっしゃったのは隙間ということですね。

部会員

ギャップを作る計画を、貴重な遺跡があるのだからそこをギャップをつけるか隙間にしてしまうのもありうるということだ。

部会員

ちょっと関連しているのだが、そういう意味で今度は北側の法面に遮蔽効果を得るために常緑樹を植えるというとなすますギャップを減らしていくことになってしまうので。それとおそらく切ったところからクスノキは萌芽しやすいからどんどん芽が出るので、場合によっては5年後くらいの時には今よりも密に葉っぱが茂った状態になってくる。ちょっとこの時点では第1段階での補植、特に常緑樹の補植は考えない方がよいのではないかという気がするのだが、どうだろうか。

部会員

やるのならそれを見込んで早くやった方が将来はよいが、それがどう育つかわからないということではなくて、上から見ればふさがるから。

部会員

おそらくクスノキを4分の3まで詰めれば北側の方の落葉樹なんかも早く伸びる。元々雑木で生えてきたものだから。

- 部会員 上からと横からで木の形を考えればおのずと何年後にどうなるというのは、いまちょっと作業できないが、わかることなので。
- 部会員 これは上を詰めた時は枝も詰めなければいけないから、コンパクトになるということなのだ。1本1本の樹形が。幹だけは太いままでいますよと、そういう形から2年3年で枝が出てきますよと。それで、10年後20年後はこれはまた太くする枝というのは見えているので、だから私は最初からちょっと面で考えればもっと少なくてもいいよといつか言ったと思うが。それはもう当然クスノキなどはすぐ葉張りがすぐ10mやそこら行ってしまうから。
- 部会員 だから、将来の方針に関わるのだが、もうある程度例えばあと50年間何年かに一度木を追いかけて剪定をしていくという前提とするか、それとも持続的に予算のかからない形で木を作るかで違ってくるので、そこを誤ると将来に禍根を残すことになるので。
- 事務局 第1段階での補植の話がありましたけれども、第1段階での補植というのは今日御覧いただいたクスノキの木というのは、下の方枝があまりない今高さまで育っています。そういう中で、後ろに校舎が見えたけれども、落葉樹で葉っぱが今落ちているために校舎がかなり透けて見えていました。そういった部分の落葉樹の部分に常緑樹などへの置き換えを行って埋めたいと。冬の時期にそういうものが今見えてしまうという状況があるので、そういったところを少し改善していきたいというようなところだ。それから今のが延びていった時にまた当然、それは今手入れをしなかった場合にも同じようなことで、今度はもっと高く伸びていくということになるのだと思うので、そういう面では伐採はある程度必要なことだと思うのだが、その上でもやはり史跡、遺構に先ほどの中でも土塁に今以上の負荷をかけないような形でというようなことを言った。その意味では何年かにといいところでは手をかけていかないといけないといふところが残るものであるのだが、そういうことを行いながら長期的な管理をしていかざるを得ないだろうというふうに判断している。
- 部会員 今の話に関連して落葉樹だから当然見えてしまうという話だが、これはどうだろう、学校の教室の3階部分はこちらの土塁の上から見ても中はそう見えない。問題は2階部分1階部分に視線が下がっていくと学生さんたちも上から見下ろされるとちょっとやだなという印象があるかもわからない。そういう場合は土塁側のほうの植栽で例えば中木程度のもので目隠しをしてあげると。ただやはり常緑樹で埋めてあげるとまたそれが校舎の方はたまらない、日陰になってしまつて。だから、ああいう落葉樹が混ざっていて日差しが入る時期もあると。そういう方が私はいいと思うが、どう

だろうか。

部会員

問題のひとつは落葉樹を常緑樹に植え替えることですが、それなりに技術的に大変な作業でしょう。今聞いている限りでは、事務局案は単なる素人理屈の御都合論にしか見えない。実際にはばっさり落葉樹を切ってそこに常緑樹を植えたら、何年かさきにはどういう生育状態を期待するのか、という見通しを立てなければならない。日当たりをよくしてやらないと植樹が伸びないことは、これまで何度も専門家の指摘を受けていますから、生育環境を考えると、中途半端な前提では目的とする仕事の成果に結びつかない。それから今先生もおっしゃるように学校との間の遮蔽効果の問題になりますが、これはつまりどこまで完璧さが求められるのか、学校側が満足するような完璧な遮蔽効果を公共経費の負担で考える必要があるのかどうか疑問に思います。私もこれまでそれとなく多くの学校見る機会がありましたが、往来から校舎なり校内なりが見えるところはたくさんあります。外から校舎内への見通しをさけたい場合は窓にブラインドをかけて遮蔽するとか、そういう工夫で別に問題なく共存しています。公園の樹木整理にかこつけて学校側への遮蔽効果云々なんていう問題を持ち出されても、いかなる遮蔽が妥当かという公共的な基準があるわけではない。木を切るなどか、代替えの木を植えて遮蔽しろといっても、それは美観との調整の問題もあるし、なかなか要求通りに簡単にはいく話ではないと思う。

部会長

ちょっと私から質問なのだが、北東土塁のところが開示される状況になるというのはいつのことなのか。

事務局

今のこのスケジュール表でいくと、平成30年度に整備完了を想定しているので。

部会長

今から5、6年後くらいか。

事務局

そうだ。

部会長

ということは、逆に言えばその間に色々な手を打つことができるということなのだ。つまり、来年仮にクスノキの一部を切る、補植をし、それがどうこうしていくそういう姿の最初の段階に人は入らないのですよね。

事務局

はい。

部会長

ただし遠目にはやはりそこに遮蔽効果というのか、その遮蔽が少し見えてしまう状態がいずれにしてもできる。それは、見る場所から言うと上である。本丸の今日皆さんが下を見たあたりというような条件があります。だから、最終形の話とそれがいつからオープンになるかというのは調べて考えないといけない、ということでしょうか。そうではないのか。

事務局

そのとおりである。最終的に要は本丸側から見たというところという外側の市街地の側への遮蔽効果というのが大きな部分になってくるかと思

うし、実際に今補植をしてという部分で言うと近場の部分での遮蔽効果というところになるので、そこについては人が入っていくのは今のスケジュールで進んでいったとすると平成30年くらいになるということだ。

部会長

そうすると、そのタイミングという流れの中で、ギャップの話もあったし、色々な要素があったけれど、それを考えていく場面はありうるのですね。

事務局

時間はあります。

部会長

それを確認したかったのだ。もうひとつの質問。やはりこれは全体には緑と歴史の共生であるから、今の樹叢の生育条件は非常に密植状態でよくないということを改善していくなかでよりよい緑にしていくということがひとつのテーマとしてあって、一方である程度既に調査をして遺構との関係を読んでたら、それは片方で確認をしながら、何か起きた時には、それに対する対応は場合によるとありうると、それはウォッチをしながらやっていくことだという意味で、やはり時間はかかる、というふうに私は理解するのだが。つまり全体としては樹叢を、今のクスノキの条件を改善するという方向を目指す。目指しながら史跡との調和を図っていくという今の流れでよろしいか。

事務局

はい、そのとおりです。

部会長

ただ、方法論に関しては今部会員、あるいは植物の専門の方々に色々方法論について考えなければいけない要素があるというお話がいくつも出てきたが、このことについては事務局の方はどうお考えになっているのかということは今お答えができるか。

事務局

まず事務局案を作るに当たって考えたのは、3つの問題を同時に解決したいというところから出てきたものだ。1つはこれ以上クスノキが育っていった遺構の破壊が進む、要するにこの状態の今ある遺構の情報が後世に伝えられなくなるものをまず避けるというのがひとつある。それからもうひとつは可能な範囲で緑が形成している景観が激減しない、損なわれない状態を維持していきたいということがもうひとつである。これは緑の総量のこともあると思う。市街地の中にある貴重な緑だというご意見も強くあり、ただそれを行政がどうしても城址公園の中にだけ市街地の緑を求めてきたということもあるのだが、いずれにしても緑が大きく損なうことがないようにしていきたいというところももうひとつ。それからもうひとつはすぐ隣接して学校が運営されているので、学校の方としてもこれまであった緩衝帯としての緑が損なわれることによりかなり危機感をお持ちだったので、それに対してやはり一定の配慮が必要であろうということだ。細かい具体的にどこからどう見えてしまうのを防ぐかというのは部会員や部会員がおつ

しゃったような技術的な問題でも解決できる部分も含んでいると私も思っているが、総論としてはそういうことがあったのでこの3つが同時に成立するような方法はできないかというところで今回、前回以前から御提示している事務局案というのはそこから登場したものだ。その中で色々難点があるとの御指摘もあったので、そこを踏まえて改善点があればそこでまた皆さん方のお知恵をお借りしたいと思っている。

部会長

その続きを言うと、今のお話の方向性の中でやや時間はあるわけだ。つまり本丸側の上の方から遠目に間が透いてしまうという事態をどう考えるのかというのは、今まで必ずしもみんなでそういう問題として認識してきたかどうかというのは私いまひとつはっきりしないのだけれど、要は北東土塁のところの上に人が立って覗かれるということを主として考えてきたような気がするのだ。

事務局
部会長

直接的にはおっしゃるとおりだ。

そこにもちょっと隘路があるかもしれないが、時間はできた。その中で、今皆さんがおっしゃっているのは要はそういう時間を活用しながらやはり前倒しのでも打つべきことは打っていく、そういう役割をこの植栽専門部会は果たすという前提でものを考えてきて今後もやっていくということではよろしいのかどうか。つまりそういうふうに書かれていると私は思うのだが。要は植栽専門部会の議題が、実は下を見ていてここ2年何なんだろうかなあというのがいまひとつはっきりしなくて、御用米曲輪のこともそうだが、どういう議論をするのかなあと思ったのだが、取組んでいきそれを補っていく方法を、生育の状況を見ながら適切な手を打っていくというふうにこの部会がある、というふうに理解をしたいのだが、それでよろしいか。

部会員

そういうふうに短期的なことでやっていくと、この計画だけぱっと見れば何十年後に壮大な照葉樹林を作るための計画そのものに他ならない、これでは。ですから、短期的なことはよいが、長期的にはもっと痛みが増すような一番悪い方向になりかねないという思いが大きい。

部会長
部会員

今の案はよくない、とおっしゃるのですか。

北東土塁の話に限って言えば、大別すると遺構に対する被害をできるだけ軽減していこうということ、もう一つは植栽自体を健全化して、なおこれに付随してどこまで遮蔽効果として活用できるかという2点になると思う。遮蔽の問題は市街地景観との間の遮蔽と对学校の遮蔽で、これをどの程度にするかということの二つになる。この遮蔽も技術的に対応のし方が違ってくる。それぞれ全く異なる条件のもとにあり、個別にデリケートな対応が求められるだろうし、なかなか簡単ではない問題だ。ただいずれに

せよある程度の我慢というか、限界というものがあるので、その点を認識してもらってそこそこの落しどころを見つけていかないと収まりにくい。

部会長
部会員
部会長
部会員

それは遮蔽の問題ということ。

そう、遮蔽の問題も。

全てが、ということか。

そう。遺構の問題もこの事務局案で言うと、8年かけて15本のクスノキを切って、その後はとにかく自然に倒れるのを待つおまかせ処理、という大変無責任な案しか出てこないわけだ。こんなことでこのあと二十何本のクスノキをあの狭い範囲に伸ばしっぱなしにしたら、のうのうと生い茂って遺構は大変なことになる。いくら枝詰をして根が張るのを抑えと言ってもその程度では効果的な対処にはならない。どんどん幹は太り、根張りを広げ遺構を傷めていく。その遺構救済という課題に対して事務局案は危機意識が大変希薄で、15本切った後の処置について無責任である。この案では私は絶対承知できない。そこから先の対応をどうしていくのかという、責任のある見通しを立てた文言をきちんと実施計画として落しておかないと。だから、そういうことでこの事務局案では何とも議論のしようがないところにきてしまっている。やはりプランを立てるに当たっては、始めから植栽の専門家を交えて、具体的な段取り論を組み込んでいかないと、実効ある計画につながっていかない。この2年間同じ話を繰り返しているのだ。これまでの事務局では、専門家も交えてみんな頭を抱えて議論してきたものの、どういう切り口でどういう処理をしていけばいいのか、全くらちが開かない。

部会長

それはそうなのだが、現実的にはある種の答えをとにかく作らなきゃいけない段階にそろそろきているのだ。

事務局

そうですね。

部会員

答えを出すにはやはり具体論が見えてこないと答えの出しようがない。

部会員

今の事務局の方で言っていた条件を満たすとすれば、クスノキはとりあえず切らなければならないですね。いつでもクスノキは復活するという感じで、そういう案になってしまう。そういう感じがする。

部会員

事務局案で第3段階までしか書いていないが、枝打ちをして樹冠がかなりきれいになるには5年先、まあ10年くらいは落ち着くまでかかると思ってもらった方がよいと思う。そんなに2、3年くらいではいい形にならないので。そうすると5年過ぎ10年過ぎくらいに樹冠がぶつかるよといった時にもう1回間引くやつを、遺構に支障のあるものを残してあるわけだから、検討する必要もあるのではないか。だから最初からもうだめだと切っていくのか……。(部会長：もっと時間がかかるぞとおっしゃっている

のですよね。) 多分そんな皆さんが想像しているように幹を詰めて枝を落としてすぐこんないい姿になると思ったら大間違いですよ。絶対ならない、5年はかかるので。こうなるには。

部会員 細かい葉がいっぱい出て、枝全体にこう細い枝がいっぱい出て…。

部会員 それで高く切れば切るほど頂部優勢だから、上の方からしか出ない。下の方の、隣の学校を目隠ししたいところには枝は出ない。そう思って欲しい。

部会長 要は理想として、密林になってしまうとおっしゃったけど、そういう状態でなくて、クスノキを中心に今それこそ現実に全部ばーんと切って新しく植えるという方法は多分有り得ない。これはもう、選択の外にある。だとすれば、今あるものをベースに、環境そのものを景観あるいは遠目から見た形でよくする現実的な案というのはどうなのか。

部会員 だから性急に本数ということではなくて面としてとらえれば、十分に葉張りが10m出ているよという場所と、葉張りがこうなったらいいよと、そういうところだけは置くと、いうことをやって、最初にごめんなさいをするしかない。木には罪はない。植えた人間が誰が植えたか知らないが、植えた人間もそんなことがあるとは思わないから、こんなに大きくなるとは思わないから、みんな植えている。だけど後世の我々はこういうことをしっかり議論して、これはちょっとご退場願ったほうがいいのかどうか、これはもう何百年生きてもらってもいいよという場所なのかどうか、そういうことを踏まえて議論をしておいて、じゃあ残した緑で十分緑をカバーしたいし、足らなければどこに木を持っていくかと、ここが公園で緑が足りないよということになれば、これは市の行政の中で考えていただいて、緑をどこかに作っていかなければならない。ただここに関して言えばこれだけクスノキを残すということはやはり15年20年経つとまたこうブッシュになってしまっ、今のミニ版みたいになるだけだ。はっきり言うと。(部会長：それは皆さん共通の感覚だ。) そうでしょう。

部会員 僕もそう思いますね。

部会員 先生だってよく御存知で、植物をやっている者は皆そう思う。今の状態で残すというなら残して、10年20年の間には…。

部会長 つまり、部会員のおっしゃっているのは要するに1本1本を(考えて切るのを)何本とするよりは、面としての変化を考えてその中で最適な環境を具体化する、そういうプランがいる。

部会員 ですからそれを採るか採らないか、ということなのだ。行政が、まあそれは調整だから、当面20年はそれでやられるのかどうか。ぼくらは植物が本来こういう姿になりますよということで話をしているので。それに対

してどこで線を引くかというようなことは私たちの範囲ではない。私たちはあくまでも植物は500年生きますよ、600年生きますよと、直径2、3mになりますよ4mになりますよ、という話なのだ。だから、それでいいのかどうか。で、重量で遺構を潰してしまう。確かに根が太っていくので。細いのがだんだんだんだん太くなっていくので、どんどん石を、押しつける。(部会員：悲惨な状態ですよ。) だからそれは私は植物の方の専門で意見を申し上げているだけで、後どうするかというのはやはり行政の方も考えていただかなきゃいけないと思う。

部会員

この調子では、もうなんていうか、あっち向いてこっち向いてホイというような議論をさせられていたのでは計画が立てられない、腹を決めてかからないと。ところで、事務局の心配する緑が大幅に減少するするかもしれない、そういうショックがないようにしたいなんて、そんな都合のいい対処方なんて現実的に有り得ない。いま事務局案が提起している案、つまり残りのクスノキを仮に4分の3の高さで切った姿を想定してみてください、これだけだつて大ショックの景観変貌ですよ。だから逆にこの実施案についても、ある程度全体の変化と見通しを、遺構の保全と新たな植栽の育成についても、こういうふうにしていかなくやならないということを市民理解にしてもらおう努力が必要です。市民の皆さんにもよくそのことをきちんと踏まえていただいて、緑が減ったと言ってすぐヒステリー現象で罵詈雑言をぶつけるような、そういうような短絡な反応や荒んだ環境から卒業していただかないと、本当の意味の植栽計画というのは立てられない。

部会長

その問題は色々あると思うが。

部会員

今言ったように残されたクスノキの枝張りの育成だけのことを考えても、枝張りに必要な空間を大きく開けて、いい姿の木がよい枝張りができるように保護して、いい樹形を整えていく、そういうことも課題のひとつです。

部会長

それはみんなそういう方向で議論をやっているはずなのだ。方法論が違うのだ。

部会員

方法論、もうひとつあるが、クスノキの樹林が都市にいいかどうか。だからもしかしたら逆方針で、クスノキと他のものを入れ替えていく。1000年先、1000年単位でそれくらいのことを決めてしまってもよいと思う。そうしないと、あれが今のクスノキの照葉樹林みたいなものを決しているとは思わないので、それこそ市民合意で将来もっと豊かな森にしまおうという計画で…。(部会長：様々なまさに判断でそういう政策があるとおっしゃったわけですね。) そういう議論をして提案をしなければ解決はつかないだろう。

部会員

そういう議論も大事だ。それは遺構保全のためにも植種を入れ替える、

それくらいの発想を持たないと、クスノキのままではたまりませんよ。

部会長

それは時間がかかるのだ。

部会員

遺構の面からも環境の面からもよくない。

部会員

どこかで腹を決めて段取りを決めないと仕事にならない。

部会員

ちょっと写真を見て色々感じたところがあるのだが、まずこの樹叢、北東土塁の樹叢の高さ、一体何mくらいが理想なのか、といった議論もまだ答えも出ていないと思う。25mもある。

部会長

事務局案はある。事務局のお考えは今日の資料に出ている。上4分の1は詰めるという。

部会員

樹高で言うと何mくらいなんでしょう。

事務局

20m前後ではないか。もっと低くなる。

部会員

15mくらい。

事務局

はい。

部会員

北東土塁の北側法面、で、南側平場ここに補植した場合にその高さが15mくらいの樹叢ができるまでの間にどのくらいかかるのか、ということもちょっと知りたいと思う。で、この議論をしていく中で北東土塁の上にあった米蔵を復元するのかどうかといった方向性もちょっと見えてこない。こういった方向性も考えながら決めていきたいと思う。

事務局

まず最後にあった北東土塁上の米蔵については現在の実施設計では平面表示という形で残すと。で、そこにあがって、北東土塁については横にずっとかつて通路が土塁上にあったのとは違って、その平面表示した蔵跡を見るためにその部分に登ることができるけれどもまた同じ部分で降りていただくという、その上り下りする。横に土塁上を歩けるような通路という形ではなくて、そういう形での使い方にしましょうと。見学の場所にしましょうということが今実施設計の中に盛り込まれている。それから平場側の補植で15mの高さのものを作るかどうかというのはこれから平場側の補植でその高さが必要かというところもあるので、その辺についてはまた検討することになるかと思う。

部会長

検討というよりも、今はわからないということだ。

事務局

はい、そうですね、平場については現在の遺構の状況からはまだどこにできるというのが、土塁の際にできるという、土塁の際は逆に土塁を見せたいところでもあるので、そこにあまり一列に並べる補植というのはいかななものかな、というところだ。

事務局

そうですね、事務局が申し上げたように基本的に曲輪の内側に遮蔽効果を持たせるような補植をするということは現時点では考えていない。当然補植を何箇所か点としてある程度ポイントとして置いていくということは

考えられるが、遮蔽効果で置くということは考えていない。

部会長

したがって、北面しかないだろうという判断を事務局としてはしている。

事務局

そうですね、そういうことで一応北側の法面のほうに遮蔽効果を将来的に置き換えて行こうというふうに考えているので、例えば現状で今の市のほうで提示させていただいた第3段階のクスノキまで伐採を15本したとしても、遺構に影響があり続けるまま一応残すというクスノキも何本か残っているの、まあ例えば北側法面のほうにこの遺構に影響がありながら残しているクスノキのすぐ後の部分を優先的に例えば常緑樹を植えたりして、こう一列の遮蔽ではないのだが北側法面と北東土塁上で併せての遮蔽効果が保てるような例えば案というものを第4段階というのか、先生がおっしゃったような途中の段階でも間伐なども考えてそういった北側法面と北東土塁一列ではないのだけれどもどちらもセットで遮蔽効果をまた考えていくということも必要なかなというふうには考えている。

事務局

それから、高さの話があった。先ほどの（現地での）一番低いところの木あたりのところのラインであればということところが想定だ、ということで。今日現地でもお話を事務局のほうでしていたかと思うが、それは天守閣の側から見た時に、天守閣登ったりなんだりして御用米曲輪の方向を見た時にそのくらいの高さがあればそのうしろの建物などが隠れていわゆる市街地からの遮蔽効果というのがこの高さまであれば確保できるのではないかと、ということだ。

部会員

北側斜面の補植について、ひとつご指摘したいことは、ここは比較的傾斜がきつい、法面の。だから例えば5m6mくらいの木を植えようとしても、傾斜がきつすぎてそこに土留めか何かをしないと木が落ち着かない。だから、そういうことのないようにするには、2m前後の若木をまず植えておいて、そこで自然に根を張らせて大きくすると。だから、ちょっと時間がかかるわけだ。その辺を認識していただきたいと思う。場所によっては植えられるところもあるが、相対的にえぐれたような斜面なので、非常に木は植えづらい。

事務局

事務局としてもその辺はやはり大きなものをいきなり植えられないなというところもあって、そういうことで第1段階のところの中でも補植、植え替えということをやっているかないと、5年6年経ったとしても効果が発揮されるまで時間がかかるので、早めにそこについてはできる所から手をかけていく必要があるのではないかと、ということだ。で、先ほどどのクスノキが太くなっていくだろうということ、そもそもの話ということにもなるかなと思うのだが、この北東土塁のクスノキの話の中では昨年もう

1年以上にわたってこの話はしているかと思うのだが、その中でもやはり市街地からの遮蔽効果、あるいはある一定の景観を作っているというようなところが御意見として出ていて、そこについてはやはり確保する必要があるだろうという前提でこの案を作っている。そういう面で言うと先ほど部会員からも御意見があったが、太くなっていくのではないかというところはあろうかと思う。で、そういうところでまた10年のところでどうなのか20年のところでどうなのかというのはあるかと思うが、そこについてはその段階で実際にこの整備をして、そこでなっていた時にやはり手をかけないと難しいね、その段階では遮蔽効果も多少少し犠牲にするとか、あるいは逆にうしろの部分の遮蔽効果がどれだけできていくかわからないかというところもあろうかと思う。それを現在のところで見通すというのは非常に難しいというところもあるので、その辺についてはまた課題としてまだそういうところもあるんだよというところで認識をしていくということが必要なのかなというふうには思っている。ただ、長期的にはこの案の中でもクスノキというのは置き換えをしていく、いずれは長い将来についてはほかの樹種に替わっていただく必要があるのではないかとこのところではこの中では考えているつもりだ。

部会長
事務局
部会長

で、そのスパンは要は5年とか8年とかそういうスパンではない。

はい。50年、100年の話をさせていただいている。

ただ、今日の段階の事務局案に対していろんな話が出てきていると思うので、もう時間もないから、これいつもこの案で行きましょうと決まらないが、結局精神は緑の環境は大事である、その生育環境としていい環境を作っていき、やはりプラス部会員のおっしゃっていることもあるのだが、街の中にあるかなりのボリュームの緑がこの場所の中であって、それはお城以外のところにはなかなかできない。それは大変重要なことであって、そこを基本線として守っていくという話の中でやはり現実的に遺構への影響も軽減を図る対策を考えて、優先して切るところもあるけれども時間をかけて付き合っていく、まさに緑と歴史の共生を図ろうという話で今全体をお考えになっておられるわけだ。ところが一方では本数も決めなきゃいけない、そういうこともあるけれども今日は部会員のお話のように面というところももっととらえろという話が出てきていて、それ自身も要は緑の総量があるいは緑の姿、景観、遮蔽効果はちょっと順番が遅いかもしいけれどもそれも重要だという議論の中でそういう考え方もあるんだよというお話がある。したがって今日の話は8本をまず切って、そこから3年なり、3年という話もあるし5年という話もあるし、10年という話もある。そういう時間の中で色々な遷移をチェックしながら進めていかなきゃ

いけない。これは、今のクスノキをある程度前提としながらものを考えていかなきゃいけないということなので、やはりモデル修景と同じようにできる条件が制約をされている。その中でなるべくベストの選択をしてまさに歴史と緑の共生を図っていくという、まあそこまでは一応だいたい皆さん共有できたと思うのだが、今日の何本をどうこうする、何年でどうこうするというのはややちょっと見直さなきゃいけないのかなあと私は正直思います。で、私の立場意見を言ったのだが、いろいろなもうこれで行くというような腹固めを市にもしていただかなければいけないし、やはりそれがうまくいくための色々な方策を間で打っていくというのが一つの条件である。それは緑もそうであるし、遺構もそうである、そういう流れの中でしか植栽計画を具体化することはできない。その分だけこの部会にいろんな責任ないし専門的判断が委ねられるというふうに思う。それに対しては皆さんそういう覚悟で市民の部会員の方も…。

部会員

ここで、当面の妥協案的なことをひとつ申し上げてみたいと思う。やっぱり今出されている事務局プランをこのまま決めるわけにはとてもいかない。ここでフィックスされるとあとで動きがつかなくなります。当面とにかく何かをしなきゃならないとすれば、ある程度の整理を進めなければならないという局面があるわけだから、その部分に焦点を絞って、事務局の最初の実施案、すなわち第1回目のクスノキ8本を切って、残りのクスノキは成長後の高さが4分の3になる程度の枝詰め作業をやるということです。その整理がついた時点の景色を見て、あとどの木とどの枝までは残せるかということをもた検討して、選択して次の作業の展望を得るということです。こういう仕事はあるレベルで一度整理をしておかないと、次の仕事のイメージにつながりにくいから、まずはこういう作業環境を作ることが大事だろうと思う。

部会長

私もその意見には同感だ。やはり進めるというところから、ウォッチをしながら。難しいのだけれど。

部会員

ただ、例えばこのクスノキの数を少なくして、数少ないのを一点巨木主義というかすごく立派な、右側にあるような(No.101)樹冠がしっかりしたようなクスノキをぼん、ぼん、ぼん、ぼんとやるのだとすると何本ぐらいできるかというのはだいたい想像がつく。そのためにはそういうふうに今の段階で間引かないと、はっきり言って。だけどそれを怖いからできないなら、ある程度残して現状の遮蔽効果を残しつつやっ払いこうとすると、今みたいに4分の1くらいのところで切って、だけどそれは今みたいな主幹が太くて立派な樹冠を作るのではなくて、それよりはずっと細くてまたいずれは上が全部密集したクスノキの林ができてくるというのは想

像していただきたい。それは、どちらも選択肢がある。富田さんがさっきおっしゃっていたのはそういうように上がふさがってつながったクスノキの林ができます、ということ。それはひとつの景観ではある。だけど、思っているのがクスノキのもっと立派ないい樹冠をしたクスノキをぼん、ぼん、ぼん、と生えてきて、間に少し落葉樹があるようなものを目指していくのだったら、ちょっと違う方法になる、ということだ。

部会員 ここで50年計画をこの委員会でやるべきなのだ。それでなければ絶対動きはしない。森林計画というのは、そういうものだ。あれだけの大きさになったら、自動的に自然の法則で動き出してしまうから、もうそれを計算して50年計画を立てなければ、最悪の方法になってしまう。

部会員 部会員の言うとおりでね、なかなかそんなふうに行かないんだ、やっぱり。植木屋さんではないが、木を見ながら…。

部会長 確信犯というわけではないのだから、それだけは宿命ですよ。

部会員 やはり第1段階を進めた方がいいと思う。

部会員 いずれにせよ第1段階を進めないとしようがない。

部会員 ちょっと今、確かにあの距離の中に例えば10本あればいいと。だから今あるのを切り詰めてそれから吹かしなおすという、それはやはり相当時間がかかる。いい樹形になるためには。電信柱にこうちょっと出ているような状態。だから、クスノキらしい樹形を得たいのだったら、少し上のものを枝のいいものを持ってきて新たに植えた方が時間的には早いのだ。今のあれを利用してやろうということになると…

部会長 でも、要は今の樹叢を必要なものとしてとらえながらそれを進めていくという方法論しか現実的にはないのだと思う。

部会員 部会長、ちょっと待ってください。その、今のクスノキの状態をよいものとしておられるようですが、果たして本当にいいクスノキの樹形と言えるのでしょうか、ということから疑問です。今日も現場視察で改めて感じたけれども、野球場観覧席の影響を受けたクスノキは幹が削られはらわたが出かかったような格好で、痛々しい姿の木がたくさんあります。はっきり言うと醜悪な樹形も少なくない。深手を負ってよれて松葉杖にすがりながら並んでいるようで、気の毒なくらいです。そういう樹木は公園の植栽としてふさわしいとは言えない。公園樹木にはとても向かないような姿です。残しておくのはいかがなものか。やはり公園はきれいな樹木で修景していくことが基本であり、大変大事なことから、他の樹種に植え替えるということもあろうかと思う。とにかく一度全体の効果と景観を見きわめるために8本切って、残りは上を詰めて、それでまた次の選択をしていくことでしょう。これは連続技でやらないと、時間置くとまた枝張りで元の

繁茂状態に戻ってしまい、整理作業の意味がなくなります。

部会長

それは何度も失敗を繰り返す方法なのですよ。

部会員

それは植木屋さんがやるように樹形を見ながら剪定をしたり、樹種を置き換えたりしていく、そのような感覚で毎年仕掛けをやっていかないと効果のある植栽整理と言う結果に至らないだろうと思う

部会長

最後に部会員はどういう風に考えますか。

部会員

色々なことを言いたい、もう時間だから最終的にはある程度どこかで妥協せざるを得ない問題だろうと私も思う。それぞれの立場があるから個々の立場を貫こうとすると絶対これは話がまとまらない話なので。ただ、我々としては中心部にある非常に貴重な緑だと。この側面をぜひ大事にして欲しいということで、とりあえずそれなら事務局がいうように8本を取り除いてみてその後の景色がどんなふうになるのかとかいろいろ検討したうえで第2段階をまた考えるという方向くらいでまとめざるを得ないんじゃないかと。それから遮蔽効果の学校との話があったが、今まではあの土塁上が通路になっていたのだ。ところが今回は整備した後は通路はなくなるわけなので、あそこに人が自由に通り抜けすようなことではないので、平場のところにいずれは通路ができるだろう、しかもそれも、まあ早くて3年、公開できるのは多分5年くらい後ということになればその間に色々な手も考えられるだろうということで、あの上を歩くわけではないから下から土塁に上がって学校ということになれば、かなり遮蔽は土塁自体が遮蔽するような側面はあるだろうと思う。

部会長

そこは高校にも説明しなければいけない。

部会員

ですから事務局自体は史跡と緑の共生ということで、非常に言葉としては理想的だが、現実的にはこれやるとなるといろんな観点があってなかなか難しいだろうから、まあ我々はあそこが少し混みすぎているということでは認識を持っているので、とりあえず事務局の第1段階をやってみてそこで色々また検討したらどうかと。

部会長

そういうことがひとつの線かなあという。

部会員

それは我々の会の中でも、何だお前そんなことを言ってなんて異論があると思うけれども、やはりどこかに落ち着けなければならない、政治の世界だから、そういうことでやってみてまた議論を深めたらいかかでしょうかと、まあそのように思う。

部会長

もう時間が5時半です。これで色々な御意見がまだやまやまだということとはわかるが、今日のお話を少しまとめておきたいと思う。

1点目の件は先ほど申し上げたとおり大筋取組としては成功しているし、評価もされている。ただ、色々な部分でそのことによって新しい要素も出

てきたし、不足している今まで考えてなかったことも出てきたので、そのようなことも含めて先に進めていく必要がある。そのためにも次のモデル修景の場所を決めて、次回それを議論したい。

それからもうひとつ御用米曲輪のことに 대해서는 いずれにしても次回で結論を出したいと思う。それで、今の事務局案のある部分は、これはいいのだが、根本的な部分をもう一回再チェックする必要が多分、今日の議論のなかではある。それで、それを作って妥協という言葉も多少あるが先へ進めていく一つの決めに次回はしなければいけない。それはある程度の伐採をしながら時間をかけてということもあるし、その時間の間の中に植栽専門部会、あるいは場合によってはさまざまな調査をしながらその遷移、推移を見つつ、根本に戻ることもあるかもしれないが、やりながら再度この会議で練っていくということが条件だというふうに思う。ある部分はいいいのだが、ちょっともう少し専門家の指摘を踏まえて、やはり進める以上いい緑にしなければいけないし、それには制約もある。あるものをベースにいいものにしなければいけない。それから、もうひとつやはり史跡でありますから遺構への影響をミニマムにするということをやったり一方で考えて、そのまさに歴史と緑の共生を具体化する動き出しの最初の姿を作る、ということにしたい。で、時間をかけて長期の姿を再度検討していくというのが今日の段階でまとめられるぎりぎりのことだと思うので、今回はこれを事務局の方で再度練っていただいて、そこにつながる案として承認をしたいと思うので、そのつもりで事務局は少しまた苦勞をしていただければと思う。今日のまとめとして持ち帰ってもらって、よろしく願いしたいと思う。その他の3があるが、何か。

事務局 私の方は特にございません。

部会長 ということは、議事を閉じてよろしいか。色々皆さん言いたいことがあるでしょうが。

事務局 すみません、補足で。次回第4回の植栽専門部会だが、部会員の皆さんには日程を伺わせていただいたが、年度押し詰まって大変恐縮だが3月27日に開催させていただきたいと考えている。今からぜひご予定を確保されるようお願いする。

部会長 それでは閉会をお願いする。

事務局 はい、それでは本日はお忙しい中ありがとうございました。長時間にわたり貴重なご意見ありがとうございました。